

宮本武蔵英雄傳

091425-000-6

特12-518

宮本武蔵英雄傳

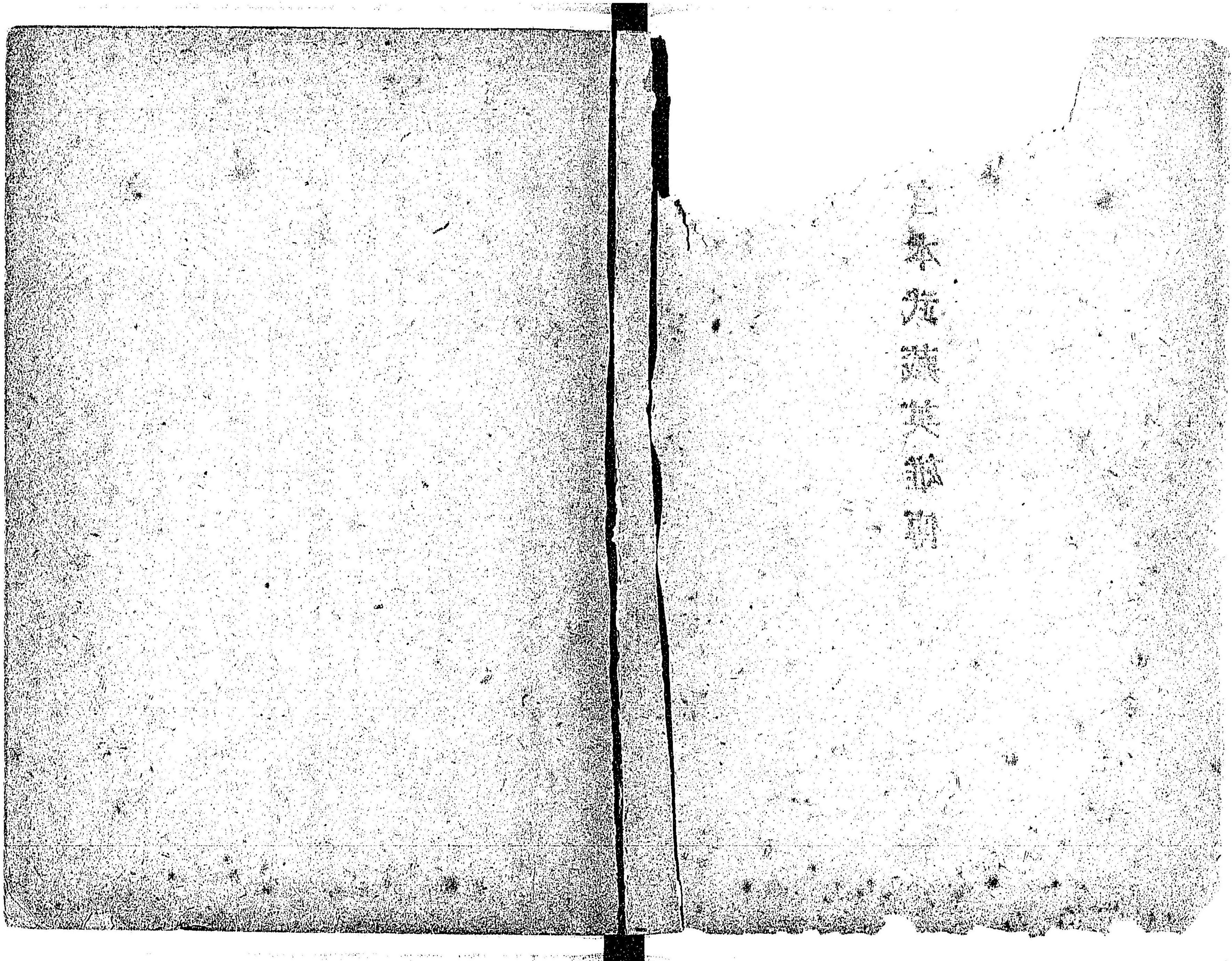
柁木素堂／著

M21

DBN-2335



特



目錄
卷一
卷二
卷三
卷四
卷五

No. 11069

自叙

小説歴史と多く理想に因て人物を畫き出し誠に斯る者世に有げなと思せたり言
とせたりもどするを著作者の此上なき手柄あるも有なれば世に岩見重太郎の
薄田隼人正毛谷村六助の貴田孫兵衛ありと今日と雖もくまの思ふゆりやつが
り思ふよ岩見も六助も是は決して宮本武蔵が事歴に據りて當時は士と武邊を磨き田
夫の俠氣を尙公世の中おれを扱ふと其流行物に後れじとて斯とものしたるなんめ
か米八丹次郎の根莖婀娜も亦時の人情に適へんとてなれば穴賢と其頃の世の中み
ないのとしたを推量て痛く鼻しらみせらるゝなりけりされを同じく小説とは云へ
父兄の復讐には俱不載天として只忠義孝道に適へんとて身を盡せるは孝子なり
義士なり假合理想の作物語にせと後世に於て其價直を持つゆゑ宜なりけり知哉



事歴正しき宮本が美談なれを請ふ讀者彼の名有て人なき岩見六助の比とひとしな
みにな思ひ給ひと

明治二十一年六月

網島の漁夫 柁木素堂誌





宮本武藏英雄傳目錄

六

○宮本無三四由緒の事

并に七之助生立英智の事

○吉岡無二齋七之助を勘當する事

并に七之助香勝寺に文學を授る事

○吉岡七之助有馬喜平治を討殺す事

并に宮本武左衛門七之助を保助事

○吉岡無二齋七之助の勘當を免す事

并に七之助宮本武左衛門が養子と爲る事

○宮本武左衛門歸國の事

并に七之助二刀の變化工夫の事

○佐々木久三郎生立の事

并に野田大膳に武術を學ぶ事

○佐々木久三郎武者修行に出る事

并に青山押田の兩人佐々木に隨身の事

○佐々木嚴流増田長盛が家に於て早業手練の事

并に嚴流京都表を追放せらるゝ事

○吉岡無二齋有馬へ湯治に趣く事

并に嚴流姫路表住居の事

○無二齋嚴流に久助の兇忽を詫る事

并に吉岡佐々木龜島に於て試合の事

○佐々木嚴流姫路表を退去の事

并に吉岡無二齋を暗殺の事

○宮本七之助實父の敵討を願ふ事

并に清正理言武者修行を免し武藏と改名せしむる事

○宮本武藏武者修行出立の事

七

并に諸岡一羽と試合の事

○武藏有馬喜兵衛方に食を乞ふ事

并に喜兵衛十字を破る工夫の事

○吉岡兼房津山の辻切退治に赴く事

并に宮本武藏吉岡兼房と試合相引の事

○宮本武藏白倉源五右衛門が道場に来る事

并に白倉が奸計入湯危難の事

○宮本山賊を懲して高田の妻の危難を救ふ事

并に高田重兵衛宮本を響應の事

○宮本卜翁が棲巢に到る事

并に塚原卜傳と試合の事

○宮本有馬喜兵衛と兄弟の約を結ぶ事

并に關口彌左衛門に出會の事

○佐々木嚴流武術手練の事

并に小倉城下に道場を開く事

○宮本武藏佐々木嚴流に對面の事

并に巴屋五郎兵衛義心の事

○黒田甲斐守殿手配り下知の事

并に豊前灘島に於て復讐の事

以上

● 稗史 小説 福老館出版書目 賣捌書肆 大阪心齋橋通安堂寺町田中太右衛門 大阪心齋橋通順慶町此村庄助

- 孝子復讐實錄
- 敵討御堂前實記
- 敵討崇禪寺馬場
- 箱根權現覽仇討
- 鏡山復讐實記
- 板垣君近世記聞
- 八百屋於七胡蝶夢
- 白子屋於熊之傳
- 煙草屋喜八之傳
- 敵討興平義勇傳
- 天誅組譽旗揚
- 繪本柳荒美談
- 宮本武藏英雄傳
- 三七 松平長吉郎傳
- 信孝
- 淀屋辰五郎實記

- 櫻田血染の雪
- 才子政海廻寫眞
- 政治實地演說
- 明治壯士の運動
- 粹客花街廻英語
- 藝妓
- 天竺德兵衛實記
- 敵討鷲塚實記
- 柿木金助實傳
- 石川五右衛門實傳
- 弘法大師一代記
- 金毘羅藤栗毛
- 宮島藤栗毛
- 錢屋五兵衛實傳
- 曾呂利新左衛門傳
- 田沼騷動記

- 明治二 夢惚兵衛開明物語
- 十三年
- 通俗軍役奇談
- 左甚五郎實傳
- 政治國會後日本
- 艶話
- 敵討肥後の駒下駄
- 社會滑稽大演舌會
- 穴探
- 通俗繪本三國志
- 鈴木主人白糸實記
- 春色ト物語
- 於俊傳兵衛實記
- 俠客五人男傳
- 佐野鹿十郎英勇傳
- 日本歌右衛門實記
- 小倉騷動雙忠傳

宮本武藏英雄傳

○宮本無三四由緒の事

并に七之助生立英智の事

野八匹夫も其經歷を稱して措かぬ竹馬の童子其英名を記して忘れざる者と誰ぞ宮本無三四
 正明其人ありけり無三四本字は武藏と書したりしが天正十八年徳川家康公武藏國江戸へ入
 城し尋で此所幕府を置きしを因り諸侯以下士庶徳川氏を憚りて又武藏を稱する者と無く
 只家康公が外孫ある池田武藏守利隆朝臣一人而已なるを宮本武藏と亦是因りて無三四
 とは嘗更へたるを有ける扱此宮本無三四が幼き時より兵法を練磨し普く諸國を遍歴して
 益々剣道の奥儀を究め其間父が警敵たる剛勇無双の佐々木嚴流を討ち英名を萬天に輝かし
 武勇を四海に轟かせし其履歴を記さん天文中足利十三代將軍義輝公の御家人吉岡太
 郎左衛門とて文武両道に達したる温厚の壯士あり是より先き將軍を供奉して江州の佐々木
 六角の討手お加はり戰場に於て數度の功名を顯し人の許せし者なりけり或時將軍義輝公に
 は諸國の劍術者を集めて其試合を上覽有しに吉岡太郎左衛門は我が得る所の自見流を以て
 試合し其妙に敵する者無く終に劍客十六人打勝ち更に疲勞の色なかりければ將軍家に
 と深く之を感ぜられ劍法無双又天下に此の如き者二人も有まじけれとて無二齋と稱すべ
 き由上意を下されざるを太郎左衛門は君恩の有難さを拜し是より後には吉岡無二齋とど
 名乗けり扱も盛衰榮枯天の命ぞる所其數遊るまど能はず將軍義輝公と三好松永が徒の

特 12
 5/8

傳勇英藏武本宮

一十

弑する所と爲り御連枝或は討たれ或は脱して他國に落行れしあぞ御家人の面々も皆思ひ思ひに離散しあける中にも吉岡無二齋と些の所縁を求めて播磨國姫路の片田舎新見村に立越に家居を求めて住居たりける茲に無二齋は二人の男子有けるが惣領は清三郎とて其年八歳弟は七之助とて四歳なりけるが恠る浪々の貧しき中おも彼古人の萬の寶子に替めやをと詠みし如く只掌中の玉と最愛み其成人するを樂しみとして味氣無き月日を待暮しける然るに次男なる七之助は天質備具る智勇にや有けむ成長するに隨ひ劍術は父の流義を受繼て其早業の勝れたる事壯年の者に劣らざれを見る者之を驚歎したりける父は殊更喜悅して天晴未頼母しとて尙は教育を盡し居たりしが早七之助を已む十三歳に成けるが只其舉動のみならず力量も亦人勝れ且劍法も追々進みけるに童子ながらを天晴の劍道者にて尋常の者は勿々其片腕も及むざるほど早晩七之助も慢氣を生じ喧嘩を好み常に已れより遂に年増なる子供を打擲さ毎度之を罵懲し人を人とも思はずして只侮り輕んじて大人をも恐れず動もすれば我意の振舞をぞなしにける父は此体を見聞するより大に驚き屢々折檻を加ゆれども些も聞入る様子無く益々我慢の増長しけるに卒や嚴しく懲さんものとて父と只曾其機會を待居たりけり恠て一日の事無二齋と庭前出で手裏劍を打て慰み居たりしが元來妙手の事あれを百發百中外るゝ事と無き筈なるに如何はしけん後の劍一本思れ外に的を外してけれを此は不審ありとて四邊を見巡す折しも後背の方に大聲を發して笑ふ者有よぞ無二齋と誰あるやらんとて振り返り見れば七之助なるよぞ大に怒りて曰く憎き奴が現狀なる哉小兒の分際として親を嘲り笑ふ不届者奴今一回口を開き見よ一討み成さんと云懲しけるに

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

七之助と些も怖るゝ色なく斯斗りの間敷の的を外し玉ふ事の可笑ければ笑ひ候なりとて猶も笑は止ざりけれを父は益々怒り甚し之憎き奴めと云様お腰の一刀拔手も見せず飛鳥の如く馳寄て切て蒐るを七之助心得たりと飄然と潜り父の後背に直立たる其速きと恰らふ求食の乙鳥飛返り袖下潜る如くなり父と透させ切込鋒尖は電光石火の端麗に似て吐嗟七之助と其刀下眞二つなるべしと思の外身を躍らせると見ゆしは晩く早境界は柴垣を飛跳て後を見ずして逸足に影を止めず逸失たて愛あて無二齋は刀を鞘に納めあがら寶勢ひとは言ながら我亦狂氣の沙汰なりしと獨言つゝも塵打拂ひ一間の中に入りあけり

○吉岡無二齋七之助を勘當する事
并に七之助香勝寺に文學を授る事

恠りし程も七之助と父が尖利刃の下を逃れつゝ我家を跡お馳去りし最早遙か逃延ければ跡方を見るよ今は早や追來る狀況を有らざるにぞ漸く心は安堵そのから扱此所お到りて追がわそ何方へと落着ん跡へと猶も還られしと確と思案の往詰り放論離と翻す一車は強弱に論無之實に幼稚氣の本分おこそ有けれ茲お吉岡が居村に左迄遠からぬ在所野村と云へる所有りて此村内に香勝寺と云へる禪刹在けるが此寺の住職は無二齋の弟にて七之助が爲おも外威の正しき叔父と云ひ且常々往來して親しければ七之助と屹度思案を決めつゝ飛が如くに此寺よぞ落着ける時に香勝寺の和尚にと平生の如く居室に在て諸經お眼を晒し經義を案ト居たりしが思ひ掛せも七之助は慌忙しく走り來りて挨拶をけるにぞ和尚とよれを顧みて斯は七之助よ物騒しき体なるが何の用よて來りしぞと問に七之助は額突て額の汗を

四十

拭ひあがら有し次第を物語り且曰く今日初めて父上の早業手練の程膽に徹して恐しく思ひ
い今迄あせし無禮の段々何卒詫言なし下さる様叔父様偏に願ひ奉つると始終を断し頼みけ
るを香勝寺は熟々之を聴て頓て七之助に對ひ大不孝者能く承これ汝親の深妙無類の叙道を
今漸々知りしよな童子が分際として人を侮るゝ汝が癖なり無二齋殿は汝が父なり師なり須
彌蒼海も及び無き大恩の親を冷笑する不覺者奴が良や我が往きたりして何と詫する詞の有べ
きや叔父の我さへ恥る處あるが只汝向後驕慢の心を屹度相慎むべれと有らむ其誓言を以て
無二齋殿得心の有無知らねども叔父甥の好身ゆへ一應と詫言して取らせんとて大に之を
叱りけるに七之助も後悔なり只此上は心を改め申すべき趣を述けるにぞ即ち和尙と新見村
お至りて無二齋お對面し今日七之助貴所に對して不禮の段々重すぐも不届かれと申さ
心幼雅の理非に通せず只々親子の間柄なれを何事と思僧お免じ今日の罪を御許し下さるべ
しとて詫けるにぞ無二齋は之を聞き倅七之助事斯様々々の始末よていひししが必定貴僧の方
へ參りしならんと存せし故打捨置いひしが段々の御世話相成り忝なき仕合に存じい夫に
付親の口より斯様の事申出るゝ如何なれども七之助事才藝共よ人に秀で未頼母しく思ひ居
りしに早晚驕慢の心起り人を侮ること度々ありし故因て異見を加ゆれども些も聞入れず已
に今日の事に及べい凡そ人慢する時と禮を失ひ業お怠り身に害を起すものなれば渠が驕慢
の心を挫かん爲め暫時勘當して我家の出入を禁せんと存するあり是親の慈悲と申もの又常
々學文に従がとせ度思へども心よ任せず打過ぎいひしが御房おは無迷惑にも思されんが何
卒叔父甥の好身を思され慈愛の勘當中御手元にて學文御教授下され文武兩道は車の輪の如

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

く相離る可らざる義理を存じいへを是偏お七之助が爲め親の爲よて只管御厚恩に預りたし
とて最餘義無くも頼み所へけるにぞ香勝寺は打點頭實且尤の御頼みなり貧道とて俗縁の
叔甥奈何ぞ餘所事と存すべき七之助には勤めて學文に就せいべしとて尙は向後の事共談
合して頓て野村へ歸り七之助には以ての外父の怒り強く我を種々詫言したれ共遂に聞入無
く以後勘當して目通りを止められたり併しながら未だ年さへ少き其方手放す事我に於て忍
びざれば先々當寺に止りて學文を勤むべし武士の道叙道の奥儀を得るとも學文無ければ是
唯鄙夫の勇よして何ぞ武を用るに足らんや汝も能く斯道理を合點し一層學文に出精せよ其
學修まる上に於て復父へ詫言とる種ども成らんお心を責て勤むべしとて専ら文學の道を
修行致させけり

○吉岡七之助有馬喜平治を討殺す事

并お宮本武左衛門七之助を保助事

扱も吉岡七之助は叔父の僧香勝寺が慈愛にて學文の業を授け入るにす是より後は日夜文武
を勵みけるにぞ漸く謙讓の道をも辨へ又道理を知るに至りける扱又此頃る姫路の町お道場
を開きし叙道の師範お有馬喜平治一陽軒信實と云へる者ありて有馬流の達人諸國修行して
武術を磨きし者なるが姫路の家中を始め近郷近國に至るまで其名を聞け入門する者最多く
道場大に繁昌して今は門弟も三百餘人に至りけよば人の尊敬も大方ならず其勇名宛然朝日
の昇る如く四邊に轟きけるにぞ喜平治今と藝術に慢じ表に日下開山叙法之元祖と金字を以
て記したる最と大いある看板を掲げ人も無げよぞ舉動けるが未だ其業よ對敵無けれ心亦之

五十

官休
氏を
七
危難を
申す
つ
直
不



立
本



八十

を批難する者も有らざりしが彼吉岡無二齋が次男七之助一日處用ひて姫路の城下に到り不
圖世看板を見て其文字を讀下せば日下開山と云ふ劍法之元祖と記せしを大い笑ひ實に傍若
無人の嗚呼奴哉卒々我之を異見して取せんとして天水桶を踏臺として腰なる墨斗を振取りて
十分一筆を染め彼看板へ黒々と井中之蛙不知大海之廣と記し其傍らへ筆者香勝寺内吉岡七
之助と書き加へ徐々其所を立去ける恠りし程に有馬の門先きは往來人の群集して此樂書を
批評するにぞ喜平治も亦之を知り自ら看板を見て遣れを云々と書認志有るにぞ烈火の如く
憤り憎き者の仕業の亦是正に我顔を穢したるも同様なり此儘み有馬の恥辱此上な
し此七之助なる者と眞劍の勝負して雌雄を決せんとて座中を屹度見廻し如何に宮本久馬殿
貴所近頃大義ながら香勝寺へ往き彼者を呼來られたし若又參らぬ程ならば襟髪引攔み否應
言せ引摺り來り玉へとて大い罵り怒りけるおぞ久馬は直ちに香勝寺へ馳行し頓て住持お
對ひて來儀を述べ是非當院の七之助殿と我師有馬喜平治と眞劍の勝負仕つる可きに付き七
之助殿某と同道して參らるべし若又否まるゝ事ならば喜平治自ら罷越雌雄を決し申べきお
付左右の御返答承り申度と有るにぞ香勝寺は大に驚死此之を以ての外の事なり只今貧道が
御返答申す譯にも成難し御口上の趣一應七之助へ申開せしむべきの同人は此程より病氣なれ
むとぞ本心の沙汰おは有ましく候半と即智の詞を遣し暫時御扣へ下されよと其座を起ち七
之助を呼て喜平治が口上を傳へ其方如何なる心得にて斯様の惡戯を致せしやと問ふ七之助
は微笑して叔父様御心配之御無用なり彼の有馬喜平治は實お井中の蛙にして世間に精妙の
劍術者ある事知らず法も過たる金看板を掲げし故見懲の爲め意見を加へしに却て眞劍の

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

勝負を望むと片腹痛し右様の者おれを有馬が手の中も推量られし即時に往て勝負を決し
申べしとて此も恐るゝ氣色無れば和尙は彌々打驚き扱々汝の不敵ある者かな殊更平生教授
せし學文の主意も斯様の所業を慎む筈なり其方有馬喜平治を井中の蛙なりと申す其方も
亦幼年の分際として意見の戀めのと人も無ある所行をそ取も直さず井中の蛙なり慎む事を
慎まざして已に此の如死災を引出せり只何事云事勿れとて則ち使者宮本久馬に對ひ御立
腹の段至極御道理おは彼七之助と申は貧道が俗縁の甥にて當年漸十三歳少しく劍術を習は
せしお童子の事として何晚慢心致し其上疴症強く去て乱心の躰なれを常に外方へ出る事を禁
じ置しが昨日寺外へ出しまゝ所々を尋ねさせしへども近邊に一向見ぬ申さいれを詮方無く
打棄置し所只今の仰を承はり驚き入ていかり然ども何を申すも僅かお十歳の童子の事おれ
は幾重にも香勝寺が御詫申上いおより先々是にて御怒も止められ御宥免の程貴所より宜く
御執成下され度と最懇懃お辭を尽して詫けるにぞ使者の久馬と熟々之を聞居しが大い笑ひ
是は存外なり初も我師の看板へ落書せし程の者なれを必定無双の英勇豪傑あるべしと思ひ
の外僅か十三歳の童子にて況も疴症の乱心と申さるゝ事なれを是決めて其病の所行にして
敢て藝に慢せしと云ふも非されと師匠も差て此上咎むる事も有まじ然も共某が一存めて勤
弁も成難ければ有馬と聞て忽ち怒りの心解け然も有べし某も必お乱心者の致方とは存すれど
を語りければ有馬と聞て忽ち怒りの心解け然も有べし某も必お乱心者の致方とは存すれど
さんど存せしが聞が如死の譯なれば此上彼是申すと大人氣無し併おがら此儘も差置なと某

九十

が名汚なれど何ぞか致し看板を汚されし事を雪すんむ有べからせとて暫時考へ居たりしが
 屹度心に一の計策を思ひ付御手前最大義ながら今一度香勝寺へ往き貴僧の扱にて差免し難
 き七之助殿なれども眞劔の勝負と止るなり仍て明日午の刻に七之助殿を同道にて姫路城下
 外れに並木街道迄出らるべし某參會致し七之助殿を意見を加へ世の禮法をも教へ申べし相
 違なく出らるゝ様致度と掛合玉へと命づけられ久馬と再び野村に至り香勝寺に對面して右
 の趣を述けるに住持と大に悦び七之助か悪戯を御宥しある而已ならず其上教導なし下さる
 べしとの事貧道も大慶に存じ明日相違なく召伴れ御差圖の所まで罷出べし然るべき様御
 取成願ひ奉つると有れを久馬は委細を承知して姫路を當て歸りけり恁て有馬喜平治は適れ
 對人を打懲して恥辱を雪ぐんものと力身しが思の外童子の悪戯に有けるにぞ教導を加へ諸
 人に巳が寛仁の程を知らんものと思ひければ此に於て姫路の町の辻々木戸へ明日城下
 外れの並木原に於て看板の落書人野村の七之助を教導を加へる者なり諸人來つて見物致さ
 るべしと筆太に書て張札をぞ出しける扱翌日にも成ければ喜平治は門弟五十八許りを隨が
 へ衣服立派な着飾りて駕に打乗り並木にお到り床机に蒐いて待居たり頓て午の刻にも近附け
 ば野村の香勝寺は袈裟衣の法服を着け珠数を爪練りて七之助を召連れ其場所お來り人々の
 中を打通り一禮をなして有馬の側近く進み倚り初對面の挨拶終り七之助が過失を許したる
 禮を述べ御覽の通り未だ童子おて世の禮法も心得ず困入い何卒宜く御教訓願ひいと懇懇よ
 述けれを喜平治悠然として目禮し仰の趣を承知致したり其七之助是へと云ふ七之助は恐る
 る氣色も無く前に進みて禮を爲す喜平治聲掛け如何に我まそは有馬喜平治なり汝此程我が

看板に落書致せし事不届千万なり然れども未だ小兒の事なれを差免し遣はす間我教へを聞
 き以來屹度相慎しむべし且劍道も些は學びし由なるが小兒の遊戯にして取に足らず世の
 中には我等如きの達人許多有べし心を責て驕慢を慎むべしと諭しければ七之助と心中に此
 者己れが高慢を差置て人を侮る憎き奴覺へて居よと怒りを發しければも叔父の手前も有事
 ゆへ色にも出さず頭を下て扣へ居る有馬と猶も聲高く是童子よ屹度我詞を心得たるの又劔
 術の流義は何を習ひしや太刀筋をも檢分して遣とさん手業の程を所望致すなりと然も尊大
 に申けるにぞ七之助は今と堪へ兼ね如何にも所望と有ば我が手業の程を見すべしと云さま
 懷中に隠し持たる一尺二寸の木劔を取出すよと見ねたるが拳を固め跳蒐つて喜平治が眉間
 を十分に打たりける何のは以て堪るべき喜平治とアツと一聲叫びをわへせ眉間は摧け眼の
 玉飛出で吐と倒れて死したりける是を見るより門弟共驚破狼籍者逃すなど早くも一人飛懸
 けて一人を蹴飛ばし一人の頭上を木劔にて撲ければ額破れて息絶たり今目前此有様を見るよ
 りを多くの門弟等と是と童子とて油斷す其れ討留よと一同お拔連れて群々と追取巻一度
 お咄と討立るを七之助少しも恐れず拳を揚て打捲り早足を以て踏着け蹴倒し陽火雷火も雷
 ならず飛鳥の如く働さければ大勢の門弟等も少し白けて見へたりける此時に香勝寺は七之
 助の舉動を見て大に驚き只胡乱々々と狼狽るを七之助は衝と馳寄り驀地に肩へ引掛て逆足
 出して馳出すをソレ曲者を逃すかどて一同お呼はりく追蒐たり七之助は之を避るこど七
 八町も馳來りしが折しも向方の途より供廻り十五六人を召連れ鎗乗物に至るまで立派お粧

ふて此方を當て来る武士あれを七之助は慌忙しく馳寄て一禮おし御武家と見請けて御願を
 の一義あり只今間近くも敵の者に追詰られ難義至極の場合に其角も此法師一人御
 助けを願ひ度存じし憐を御保庇下されよと辭簡短申ければ彼武士は是を聴て打點頭委細
 の事は知らざるも武士と見懸ての頼みと有るを聞捨にも成難卒御助け申さんどて後方
 に釣せし乗物に兩人を乗せ戸を引立て御安堵おされと云ふ間も無く有馬が門弟追手の者
 ども三四十人破乱々々と馳來り只今此處へ十三四歳許りの童子一人の坊主を背負て參しな
 らん何方へ往しや教ゆ玉これと云ふ彼武士は頭を掉り否左様の者は見當らざ外を尋ねられ
 よと云捨て行んとするを追手の者と引留め否々此内よ紛を込し相違おし遠目ながら確に
 見受けしなり御隠し無之速のに出給へど云ふ中にも一人の弟子聲高に乗物の内こそ怪し
 けれ先々其駕籠を改めんと言ふ下より大勢一度立懸るを武士と大に怒り某が持せ乗物
 を断りも無く改めんとは慮外千万なり我こそは肥後國熊本城主加藤肥後守清正が家來宮
 本武左衛門と申者なり決去て指にても當すまると鎗追取て鞆を拂ひ小脇抱込み卒改め
 見られよと仁王の如く突立し有様は薄土三國の時燕人張飛が魏の大軍を叫び退けしも斯や
 と思ふをかりあり此猛勢追手の面々と大に恐怖れ且加藤清正の家來と聞て一人も手出
 しする者無くて然云る上と間違有まト然ば此所を尋ぬるも及を際取れば取逃さん
 ソレ早く他所を尋ねよと追手の人々と八方分れ尋ね行く武左衛門は後打見遣りて冷笑ひ
 道を早めて往はどに早や姫路の城下を距ること二里ばかり漸々あして安堵の思ひを爲し最
 早追手の氣遣ひも有まじとて駕籠を下させ兩人を出し其所以由を尋ねける

○吉岡無二齋七之助の勘當を免す事
 并七之助宮本武左衛門が養子と爲る事

恁て彼武士と兩人を駕籠より出して懸懸に問ひて曰く如何なる譯かと知らね共少年の殊勝
 にも法師を助け度と云ふ詞に免じて是迄保庇申せしが見れを十三四歳の童子ある小年に似
 合ぬ勇力武術殆感するに餘あり而て何方の者にて姓名と如何と尋ぬれを兩人と恭しく禮
 を爲し就中香勝寺は茲お始めて蘇生したる心地しけれを武左衛門の前に両手を突き誠お九
 死一生の場を救ひ玉へる御恩何の世にかは報じ申さん抑愚僧と此所より程遠からぬ野村の
 香勝寺と申して此童子が俗縁の叔父あていしが今日斯様々々の次第にて圖らず御救ひを蒙り
 いと子細を詳かに物語り厚く禮を述べければ武左衛門を始め供の人々も憫るゝ迄に驚歎せ
 り武左衛門は七之助に打向ひ借も今日の所行大膽あるかな然れども其勇氣尤も感ずるに餘
 り有り御親父の姓名如何申さるゝやと尋ぬるを七之助進み出で両手を突死今日虎口の難を
 御救ひ下され御禮言葉盡し難し而て某が父と申へ此近隣新見村と申す所に住居致す吉
 岡無二齋と云ふ浪人にていと聞より武左衛門大お駭さし体あて借は御身吉岡無二齋殿の
 御子息なるとや其以前某も室町殿に仕ゆし時御親父とは武術の談論友達にて水魚の交り淺
 からざりしに計らるも足利家の退轉せしより互に諸所離散して又御行衛を知ざりしが此
 姫路近見新見村に御住居とて神ならぬ身の知る由なかりしこそ恨みなれ開と定めて御不自
 由の事よていえん卒々御郷里に立越久々にて尊父に見參申べし御案内を頼ひと立上るを七
 之助は赤面なして云様某勘當を受ていへば父の許へ往く事叶はずいと云ふ武左衛門と再び

驚き足下は未だ十三歳なるお勘氣を受けしと如何なる緯にや圖定深き仔細も有ぬべし卒語られよと有ければ香勝寺傍より進出で申す様其儀は拙僧より申上ん斯々の次第よて七之助が驕慢を直さんが爲め無二齋が慈愛にて此の如くいなりとて委く物語りけを武左衛門と聞度毎に驚歎なし扱々無二齋殿の御心中實に有難き事なり某し些思ふ仔細あれば無二齋殿に是非とを見參致し御相談致し度事有り御迷惑かと存せぬども一先づ貴寺へ立越て事の始末を相談せんとて兩人お案内させ野村を當て急ぎしむ心當日申刻頃には香勝寺に到り着客間も集會り武左衛門の云様今日の珍事有馬とやらを始め門弟兩三人迄も討殺せし事なれを必定彼門弟等當寺へ尋ね來らん然る時は事甚だ面倒よ及ぶべし仍て貴僧よは今日中お支度致し一先づ御身を隠されいへ又七之助殿の事は某し身引受けて如何様ども仕つらん此儀尤御掛念有まじと早々此所を立退き玉へと云けるにぞ住僧も尤の事と承諾し旅の用意も出家の身の上心易く麻の衣に頭陀袋脚絆引締め網代笠身は雲水の物惜みとる氣色なく跡の事共能様に何分頼み參らすと暇乞さへ勿々に野村の寺を立出れば納所や沙彌と離別を惜み附従とんと乞けれども固く之を斷りて空行く鷹と諸共何國とも無く出行けり元來此住僧は殊更琵琶の上手にして神妙の秘術を極めければ後年道人となり諸山の風景を愛て諸方を遊歴なし琵琶道人と世に珍重せられし乃ち此人ありけるとなん是れ於て宮本武左衛門は七之助を伴ひ新見村に到り吉岡の門邊お於て七之助を戶外お待せ置き唯一人内に入りて案内を乞ければ無二齋の長男清三郎立出て見るお立派の武士故不審ながら丁寧其來由を問ひ幸ひ父無二齋在宿にてい先此方へ御通り下さるべしとて一室お伴ひ茶をい出し斯と

傳勇英藏武本宮

傳勇英藏武本宮

父に告げるに無二齋の之を聞け絶て久しに舊友の宮本殿の御入とはあら珍しやと大に喜悅早速立出で對面し互お一別以來の挨拶をなしけるが扱武左衛門申様某も其以來所々方々流浪の内計らずに加藤肥後守に仕て今又安堵の月日を送るあり夫に引替へ貴所には永々の御流浪定めて御苦心と察し入る失敬ながら御不自由の事もいへ何事にもあれ舊友の中も多御遠慮なと仰られよと信實面に顯れければ無二齋甚だ悦び舊好を捨てずして御尋訪お預り御厚志の段添けおし併しおがら貧しくいへども無異あれを先以て御悦び下さるべしと昔時お變らぬ鐵石心に武左衛門と殆ど感じ入りたりける此時厨所の方より清三郎盃盤を携へ出るを無二齋手に取寄て久々の對面御堅勝を祝する爲心ばかりの田舎酒一献過し玉へ卒毒味仕つらん宿し玉へと試みて差出す盃盤を武左衛門へ受下し御心に懸られし御盃盤山海の珍味も之にと増るまじ夫に付拙者所望の肴あり願はくは御許容下さるべしと云ふを聞て無二齋之實を含み野菜の下物を時の興なり先進らせんと進るを武左衛門盃を押へ拙者の所望の肴と當家の表に在り其子細と申すは斯々と七之助が今日の次第有馬喜平治及び其門弟を殺せし緋香勝寺を助けて困を逃れ出で保庇を求めし緋尋で香勝寺行脚に出し事までも逐一物語り童子ながらも天晴の義勇感入るなり扱此武左衛門と如何なる事よ未だ子と云者を持せ末の頼み無く存する故只今七之助殿の勘當を免され改めて某しに賜らる舊縁尽せぬ交りとお悦び此上有べからず偏に願ひ存づるありと詞を盡して述べ聞度毎に無二齋は驚きしが膝を進め手を突て驚き入たる今日の騒動渠が再生の高恩何を以てか報せん勿々御禮と詞よ及むすいなり且舊友の義を捨てられざる而已ならず斯までの御懇切誠お以て忝

なし夫に引替二男の不所存惜むべき奴あれども貴意に任せて今日只今七之助が勘當を免し改めて貴殿に進らすべし斯の如き無法の倅御見捨なく御教導を希願ひいと義勇に強き無二齋も嬉し涙を流して云けるは流石お父子の愛情自ら詞葉の内に顯りたり武左衛門は大に悦び早速の御承引實に以て有難し寸善尺魔の世の俚諺御得心有る上は親子の對面下されたしと戶外に立出で七之助に此由を語り頓て同人を誘引入れ元の座敷へ立歸れば無二齋は七之助を見遣り言語同斷不届の其方なれども我が舊友の宮本氏が淺からざる仰故何事も申さず差置なり汝が如き不法者なれども武左衛門殿の御所望に任せ養子に遣す間能々所行を慎しむべし尙又申聞と事あれ此方へ來れとて武左衛門に失禮の詫して七之助を伴ひ奥の一間小退き扱汝を是迄叔父に頼みて香勝寺へ遣はし置しも文道を學ばせんと思ふが故なり凡そ武士たる者殊更に幼少より文學をせざんば有べからせ已お今度の如きも畢竟宮本氏の在てこそ汝が身の全きを得たり是等を去る匹夫の勇として誠の武士の尊ぶ所非ぞ此の如き只私の怒りに主親を忘る事之れ不忠不孝の大なるものあり聖人も是を暴虐馮河の勇とは誠め置かれたり只何事も忠孝の二つ程世お重死は無しと心得よと細密に教諭しければ七之助と父の慈愛の心魂に徹し只今の御教訓必ず忘却申すま玄向後屹相慎み忠孝の道片時も忘る事有べからざれば御尊慮安く思し召玉とるべし又是くの御傍を隔て御介抱も出來難く何卒御自愛遊ばされ御堅勝の程を願奉つると涙を流し述けるにぞ無二齋と七之助が心服の体を見て心中甚だ喜ぶに付流石別れの悲しさに物には猛死武士を一滴翻す慈愛の涙親子の情こそ道理なり無二齋屹度心着き元より秀才の萌あり且劍道を達者の倅あ

宮本武藏英勇傳

れを離別の悲みを見せん事如何なりとて故意と荒々しく云様と宮本氏にも遠路の旅を抱へられし事あれば諸事に心も急がれつらん早々支度をなし發足致すべしと急立れ七之助の涙ながら父に細々別れを告げて其座を退き兄清三郎と對ひ只今御聞の通り私し此度遠き筑紫に趣け侍養の孝をも盡し難く御老体の父上万事宜をお頼み奉つる先づ暫くの御別れかれども隨分共に御無事に御暮し成さるべしと流石親身の同胞が名殘惜くぞ見へにける兄を漸く涙を押へ我門父上の御側に在れを其儀お於ては心安かるべし名殘は盡ぬ事なれども亦對面の時節もあれば隨分無事に暮されよと旅の裝束杯種々と取揃へ何くとも無く世話をぞあしける武左衛門と無二齋に打向ひ最前も申す如き仔細なれを少しも油斷相成難く追手の者共來りな心事面倒なり一刻を早く出立せんと計りに促し立て七之助を誘引別れを告て立出れば無二齋清三郎は亦更に名殘の惜まれて親子兄弟の愛情影見もる迄見送りける

○宮本武左衛門歸國の事
 并に七之助二刀の變化工夫の事

去程に宮本主従と取急ぎて新見村を出立し本國肥後の熊本を當て出立しけるが案の如く姫路なる有馬喜平次の門弟共は七之助が行方を此所彼所と尋ねけれども絶て影だに見へされば一旦は宮本武左衛門の駕籠を咎めはあせども其勇威に恐れて其場を見遁し香勝寺へも人を遣とし見せけるお是も早や立退たる跡なれば今は早や新見村去る必七之助は居るべしとて吉岡の許へ掛合來るにぞ無二齋は宮本と示し合せし事あれば勘當致せし旨を申ける故尙ほ之を疑ひて能々其眞偽を探索するお實お其家に潜伏するに非ざれば今は早如何とも致

し方あく其旨城主木下少將勝俊殿へ訴へければ檢視の役人罷り越し其子細具に聞糺され喜
 平治が亡骸は門弟中に引渡し取納むべき段申渡され此事さして嚴しき詮議も無く門弟中
 一旦は師匠の敵と表向き尋ねる跡と爲せども心中に却て七之助を稱譽せしどかや是と
 れ後日に知れし趣きなりける然る宮本武左衛門と道中を急ぎて歸國しけるにぞ日ならざし
 て肥後國熊本に着しければ先づ七之助を休息させ置き其身は直に登城あし主人清正公より
 申付られし用事首尾能く相濟み段復命に及び殊お太閤殿下にも御機嫌麗しく在らせられ
 京大坂とも至て太平の旨と申上しるば清正公も大に悦むれ遠路の所使者滞りなく相勤めし
 段太儀なりとの事なりければ武左衛門と平服し有難き御意を蒙りし段御禮を申上其後ち七
 之助が身の上の始終を委しく物語り吉岡無二齋と申古傍輩より此度右七之助を養子と貴ひ
 請け某志倅に仕つるべき約定にて召連來りし間此儀何卒御聞濟下さるべしと願ひけるに清
 正公と元より天下に比類無き武勇の名將其上義信を旨とせらるゝ事おれを豫て無二齋の名
 をも聞及び居られし故今其倅の七之助とやらんが我家來れ養子となる事おれを悦むしけれ近
 日召出すべき間神妙お養育致すべし且又汝播州表お於て義勇の取計ひをあせし絆我が心に
 適へりとして大お稱美せられければ武左衛門は面目身に餘り重々有難き段御禮申上げ頓て退
 出したのけり然れを宮本武左衛門は太守清正公より首尾よく養子の御許容を得たりしかば
 大に悦びて是より七之助を養育して文武の道を教へけるに元より一を聞て十を知るの才智
 われば我が眼力の遠とざりしと益丹精を凝して教へける扱此武左衛門と武邊一通りは何
 暗からぬ身なれども別て鞍馬流の達人おれを其流意を細々と教導なしけるにぞ七之助は其

宮本武藏英勇傳

恩義を感念身を碎死心を賣めて敵の如く勵みしむぞ今も流義の奥旨を得たり學文も亦誠心
 を盡して學びしかば孝道を盡す事至らざる所なく父子共其愛情彌々深かりける一日七之
 助熟々思ふ様我身劍道は於ては實父養父の両道を學びけるおより何れを捨てても孝道に欠け
 る事なをば此義と如何せばやと思ひ煩ひ居たりける茲に當國阿蘇が岳お鎮座まします阿蘇
 大明神と當國の一の宮にして靈驗著明の御神なれを或日武運長久を祈らんとて參詣せしが
 其日は幸ひ祭日よて參詣人殊に多ければお神殿に神樂を奏し巫女と劍の舞とて白刃を両手
 に持て舞けるを七之助は何心なく立寄見るに閃く刃は天地に象どり陰陽左右お別れ又合し
 てと一刀青眼の構へとなり自由自在に變化する有様なるに甚だ感心し是ぞ日來心懸けし劍
 道の奥儀なり我此兩刀を練磨して長短の刀を使ふものならん實父養父の兩流を捨てて又
 無量の變化ありと思ひ神前に至りて深く祈誓を籠め早々我が家へ歸りて是より二刀の工夫
 をなし人に知らせせ練磨の修行日々月々お勵みしかお切瑳琢磨お功積りて終に神明二刀の
 工夫を成就し今は天晴無双の名人と成あける一日武左衛門と七之助を招きて申様二刀流と
 え未だ聞ざる流名なり其理術變化如何と有れを七之助謹んで答ふる様父上お對し甚だ失敬
 おとゆへども二刀流の大概を御目に懸け申さんとして起て長短二本の木劍を両手お携り來り
 抑二刀流と申すと左劍を以て陰とし右劍を以て陽とし訥々として忽然たる容をなす是天地
 未だ聞けざる以前混沌として鶏卵の如し是を一變して兩儀となる則ち天地開闢の形容なり
 右劍は陽おて天なり因て泰陽の構へとし又左劍と陰おて地なり因て泰陰の構へとす此陰陽
 合して萬物生ず因て兩劍合して十字とある又左劍を右へ寄せ右劍を左へ延す是則ち青眼

の構ひあり斯の如くなれば變に應玄機に臨み千變万化進退自在おまて働き無量なり然れども若年の某しなれを其欠たる所と御指圖願ひ奉つると親子の中も自ら武道の禮義を正しければ武左衛門と是を聞て感心し天晴の才智見事の工夫其論深く其業高し然れども業と論とと相違の事を有ものなれば先々汝が手練を試見んと股立高く取上げ木劍を持て身構ひけよば七之助と然らむ御免を蒙るべしと云あがら長短の木劍を左右より取り天地お構ひて立向ふに武左衛門と十段に振上げ大喝一聲叫ぶと見ゆしが電光の如く打込來るを七之助と發止と十字に受止めたり武左衛門と猶も力お任せて押破らんとすれども磐石よりの猶堅く引のんとすれば其太刀に添ふて摺込む容体故茲お進退谷れを武左衛門も大お感心して引別れる然れども老功の武左衛門あれば今一本立合んと此度は下段は構ひて立向ふも七之助の振分けの構ひなりしと毫厘の隙をあらざりし故流石の武左衛門を大に感服して持たる木劍を投出し天晴無双の發明駭き入たり流石と無二齋殿の胤程ありて未頼母しく思ふなりと夫より一層七之助を大切に思ひける然れば七之助が神明二刀流の噂一家中に評判高く漸次に國中お廣まりければ其術を試みんとて折々劍道者の來りて試合すれども一人として七之助お及ぶ者非ざりけり

○佐々木久三郎生立の事

并に野田大膳に武術を學ぶ事

爰に亦佐々木巖流吉高と云ふ劍道名譽の武士有けり其生國は出羽國最上の片邊なる其由緒を尋ねれば父と近江の太守佐々木六角入道承禎なり始め六角の館に一人の妾有り容色尤

も勝れたれを承禎甚だ寵愛したりけるに終に此女の腹お一男出生す入道大に喜び幾久く長壽せよとて幼名を久三郎と名乗らせける然るに承禎は足利將軍義昭公の背之事有り是お因て織田彈正忠信長朝臣發向して其居城觀音寺を攻むる事急なれを承禎其支ふべからざるを知り終に永祿十一年九月十二日城を明渡し其身を始め家の子郎黨皆散々に成ければ其騷動大方ならず此際其妾も一子久三郎を懷中にし辛ふじて乱軍の中を遁れ出少々の金子を貯へ持し事あれば古郷最上在へ往着き詫しくも年月を送りけるに久三郎十三歳の年其母假初の病お臥しけるが重なる苦勞の積りてや漸次に病の重り行き今は早其玉の緒も絶かんとしを見へけるにぞ久三郎を枕邊に呼近づけ苦しき息を繼て云ふやう吾身と今回の病は逆も命お助るべしと思これお御身を最早本年と十三歳に成たれを行末は榮へを見度思へども定業おれば是非も無し因て今御身お云還す仔細あり御身は元賤しき者の胤ならず近江源氏の嫡流おて佐々木六角入道承禎殿の胤なるぞや我亡跡にても心を責め身を苦しめ文武の道を能辨へ廢りし佐々木の家名を興し美名を天下に揚られよ必お必お父母無しとて假も悪道道を學び邪ま非道の心を出さるゝ事勿れ又己れの才智人お勝れたいとて自慢する心を起し玉ふべからせ心に誓ひて齋修を省き身を慎みて家の譽を顯し玉へ然れば此世を去るとても草葉の蔭おて此母が如何ばりの嬉しく悦むん名を揚げ家を興と事千僧万僧の供養より嬉しく成佛する程も努々今の母が詞を心に止めて忘れ玉ふなど云ふも苦しき斷末間終に果敢なく成にけり久三郎は大お歎き死骸も取付泣沈み前後不覺の有様なるぞ道理なりける村内の人々不便お思ひ各集りて屍の取置き野邊の煙りとなしにける恚りし程に久三郎の其性質

原來逞しく又聰明ある者なりしお母が遺言に依て初て聞知る我身の素性氏も系圖も香しく名おし近江の源氏とて宇多天皇の御流れ其嫡孫の佐々木こそ我身の上にて有けるを斯る名家に生れたる我なれを今より武門に立入て剣道を修行なし世の英傑と稱せられ父祖の家名を再び興し一國一城の主とも成べしと心に深く思ひ込みたれを今は孤子あれども懼るゝ心おく山よ入てと木の枝を折取り刀となして終日樹木岩角を相手として腕を固め或之谷に下り崖お攀て早業の修練を試み或時之川に入て水を潜り水練の稽古して唯夫等の事のみを他念なく専ら心を砕け修行なして日月を送りける此時同國山形の城主と最上出羽守義房と稱し高二十四万石余を領し文武両道は暗からざれば東北は聞へたる雄藩なりけり此藩中に知行三百石を領し剣道の師範を命ず野田大膳と云ふ者あり其門人數百人に及びて最豊るお時榮けるが比之彌生の中旬遠近山の櫻狩せんとて其子豊丸の二歳なるを乳母お抱のせ夫婦小者お家婢あんとを召連れ頼て山邊を見巡り爛熳たる花を詠めて春色の麗としきを愛で此所彼所と座を替て盞盃を廻らとにぞ今は自然と主従ともお大酔して無上樂の境に入りけるが頼て家路に歸らんとて最上川の上流に沿ふて山路を下り足お任せて歩み來りしが乳母は小石お躓くや如何あるはずみに有たりけん懐中の豊丸回轉と轉げ出で堤の上より漲る川中へ落入れれを乳母の吐嗟と云ふ間も有るを矢を射る如き急流おて渦巻水と諸共に早川下へ流れ行を乳母と恰ら狂氣の如く周章慌忙聲懸けつゝ堤の上を疾走川下の方へ欠行を跡を隔る大膳夫婦此聲聞付け駈來り何事なるやと打見やるお我子豊丸が危急の現狀なれば皆を續けと云様に川下當て追行ぬ然ととも水勢烈しく矢を射る如き早瀬の大河如何共する

絆能くす只氣を焦ら心の喘るをかりあり此時久三郎と餘念なく釣を垂れ居たりしが今日の前へ幼兒が浮つ沈みつ流れ來るを見てしるは忽ち釣竿を傍邊に投捨て手早く衣類を脱ぎ赤裸と爲り漲る川中へ躍り入り水を潜りて急流を横切り押流され行く豊丸を助けつゝ小脇お懐き援手を切て泳ぎ還り難なく元の岸に着き飄然と身をお躍らして堤の上にお上り来る水難不得手の野田大膳我兒の危急と見ながらも施すべき手術もあらず呆れ惑ひて茫然たりしが今川下おて小童の我兒を救ひ揚げて堤の上に登り來る様子なれを夢の如くに打悦び頼に詞も出さぬし乳母と逸散に走來り豊丸を懐き取り肌を添へて介抱しけるに水を吐事夥し大膳腰の印籠より藥取出し種々お手を盡しけるにぞ漸々にして息出たり斯と見るより野田夫婦乳母小者よ至る迄悦ぶ事大方ならぞ此時久三郎と衣服を身に着け釣具を仕舞ひ今日と是にて止みなん卒や我家へ歸らんと堤の上に登り來れば乳母と小童の前お來りて兩手を突き何方の子達かは知らねども能く和子を救て給はりし若しも此儘川底の水層とも成玉ひなば預り育つる私が鹿忽の申譯には共お此川の水層とも成るべきを御身の厚情にて和子は云お及む私がお爲にも命の親にて此の禮は勿々詞には申盡し難しと嬉し涙に欣びて伏沈むこそ道理なれ大膳も亦進み倚り童子に對ひ禮義を正し偕々驚き入たる水練かお御身我兒を助けられし再生の大恩は何時かと報せん扱拙者お山形の藩中にて野田大膳と申者なり然るに先刻よい足下の躰を見るに賤しき形容とと思へども相貌恰好尋常ならず由緒有氣おぞ思ふあり廢り足下と何人の子おて斯と落魄居らるゝや我子の爲よと命の親我々夫婦の恩人なり包まず素姓を明し玉へ又好き相談も有ぬべしと最眞實に述しかば此時久三郎と面に綻

四冊

る濡髪を搔上ながら跪踞我等と此川の邊りに詫しく暮す孤子佐々木久三郎と名乗りしが素
姓を語るも恥しけれども仰ふ隨ひ申上ん先祖と近江源氏親と六角入道なるが斯様々々の仔
細にて吾が身は斯る片田舎に獨り殘され何の事業も無ければ山に入て柴を樵り川み出て漁
りつゝ其日を送る身の不運御推量下さるべしと其身の上の一伍一什を委細物語れを野田大
膳且つ驚死且つ憐み扱は孤子にいとや嘸々不自由の事あぞ有らん今日圖らずも我子の大恩
受けし事なれを今より直に我方ふ來られよ乞同道せんと云へむ久三郎は両手を突き斯有難
き仰を蒙り孤子の此身を然程迄に思召し給てる御恩の程如何斗りか嬉しく存じしなり此上は
仰に隨がひ薪水の御用なりとも盡すべしと云ひければ大膳夫婦は大に悦び久三郎が近隣の
者に所以を告げ久三郎召伴れ我家に歸りける候て一子豊丸も今は全く快くなりて常に復
ければ大膳大に悦び又久三郎をも我子の如く養育なしにける然は久三郎之日頃好める劍道
指南の家なれを此大膳を父とも師とも思ひて日々夜々も出精しけるが元より才智利發の者
なれを僅の中の上達して今は早並々の者此久三郎に及ぶ者一人も無く大膳亦世話甲
斐有とて一方あらず教導しける故其進むこと恰も五日雨中の筈の如く僅か六七年の間は天
晴の劍道者とぞ成おける因て大膳も心中大に喜悅なし極意の皆傳を授げん者は彼なりけり
とて一日家へ傳くる一卷を取出し久三郎を呼び汝未だ歳若なりと雖も劍道熱心なるも因り
當流の極意を免許するありとて彼一卷を渡し又劍法の進退虚實の次第を悉皆傳授しける久
三郎と年來の本望を達し喜ぶ事限り無く九拜頓首して是を受納めぬ斯り一程に此後は師匠
大膳は主用又は私用の多き時なとば久三郎代りて門弟中へ教導を爲す自ら工夫せし劍術

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

の妙ある所へ又師匠の極意を得たる事もへ其藝術とも日來に十倍し日を重ね月を逐て練磨
の功を積み自然と其妙所お至り今と師匠大膳よりも遙かに其業勝りける是を以て一家中の
者ぞと久三郎を尊敬する事大方なら少先生と呼ばれ専ら師匠の代稽古ををし居たりける
が師匠大膳假初の病より終に鬼客の員に入けるにぞ後の事共都て久三郎甲斐々々しく取修
め葬式作善最懇切に營みける已に大膳と死去し其子豊丸未だ弱冠なれば折角の道場を廢せ
んと残念あれを後見とありて野田氏相續せらるべしと一家中の勤めに因り師匠の跡を引受
け其儘劍道の指南致しける

○佐々木久三郎武者修行に出る事

并に青山押田の兩人佐々木に隨身の事

扱も佐々木久三郎吉高は出羽國山形に於て師匠野田大膳が道場を受繼ぎ家中の諸士に劍道
の指南を爲すと雖も未だ心には是を足れいとせず熟々思惟らく我今此山形に在て城主に仕へ
他人の家名を請繼ぐ事一旦の處仕合なりとい言へ僅か三百石の小祿あり此上猶心を磨き
身命を抛ち忠功人に勝さるとも五百石はよも過ぎるべし然も母の遺言も空しくして草葉
の蔭にても嘸や本意なく思ひ玉いん一國一城の主とも成てこそ我身の本懐又佐々木家の再
興とも成り亡母の靈にも樂まん然を此處を立退き劍道修行の爲め諸國を遍歴なし深奥の術
を磨き微妙の業を極め勇名を輝かし青雲の道を求むべしと心を決しければ一日門弟の人々
に對ひ某先師の高恩に因て當家を相續すると雖も已に先生の一子豊丸殿追々成人に付ては
當家之之を豊丸殿に譲りて相續させ某は劍道修業の爲廻國致さんと心中已お決しひなり因

五冊

て此段太守へ願ひ某し近日發足致しに付き各方には此上共隨分劍道を勵み主家の大事に備へられ又豐丸殿の事も万事心を添られ玉は度し某しも四五年経なば又々來つて各方に見參仕つらん先暫時の離別なりと酒宴を催しければ諸人と別れを惜めど止まる氣色あらざれを思々々餞別を送りける憊て久三郎は夫々手順ヲ濟ければ豐丸も跡の事共能々申殘し先づ近國を去れとて越後を當て出立し新潟の津より越中へ渡り加賀越前より近江へ出で醒の井の宿に來りけるが痛之草臥の増しけるにぞ一軒の茶店に入りて憩ひ居たりける當所と名を負ふ清泉有りて岩間を潜り湧出る清潔甘冷の清水にて是と其昔日本武尊伊吹山の凶賊退治の折心神不快に御座しが此出水を掬し玉ひて精神爽快ありしかを扱ふを醒が井の水とは名け玉ひしとぞ久三郎と茶店に在りて今此清水の岩間より奔流れる水の勢ひ自得の劍道にも適ひたればとて自ら名をば嚴流とぞ名乗りける是より尾張へ出で三河を過ぎ遠江國に掛りければ是より秋葉山に詣でんとて山を登り又山中に差掛りし折柄樹木の茂みの中よりの二人の盜賊跳り出で旅人暫く待ち候へ我々は諸國を廻る一所不住の山賊なり旅人の懷中重げに見ゆる我目お着しと運の盡衣服と共に脱捨て三拜して立去るべし然無くば汝が一命も普しく取て我が物にせんと呼これと久三郎の嚴流は之を聞て呵々と打笑ひ不運なる盜賊輩か我が懷中の物は得たを取能ふまじけれ欲くを手柄に取て見とやと些も廢かず悠々として行過んとす彼山賊們は大に怒り斯る奴も問答無用先や息の根止て吳んとて兩人一齊山刀を拔連れて飛鳥の如く切て懸るを心得たりと身を交し打込二人が利腕を引捕へ一度堂と引伏て聲を勵まし云て曰く汝等某を誰とか思ふ奥羽に於て名を轟かせし劍道の

宮本武藏英勇傳

達人佐々木嚴流吉高と我事なり汝等非道の働きを爲し民を惱ます大惡人天神の罰を思ひ知れよと既お刺殺とべき狀況なりしかを兩賊之涙を流して曰く斯の如死英雄の劍師とも知らずして無禮を致せし段眞加の程も忍らば何分免し下さるべし再生の大恩は生々世々忘るゝ事有べからず偏に仁惠を頼み奉つると一向に詫けるにぞ嚴流と微笑ながら兩人を引起し過つて改むるに憚る事勿れと云ふ金言もあれ汝等彌々心を改め本心に立歸るとならむ我何ぞ刑を加へん抑も汝等の生國は何れにて亦姓名は何と稱するぞと尋ぬれを兩賊は頭を地お付て我々兩人が生國と甲斐にて姓名は青山門平押田佐吉と申し元と武田入道信玄も仕へ武田家滅亡の後浪々の身と成りし者にて又寄邊なきまゝに斯る業を爲して敢果なき月日を送りひなり哀れ御慈悲に命を助者られ今より兩人共先生の門下お立ん事を免し給とい身を碎き骨を粉にして一命の大恩を報玄申さんと云ふ其言葉お偽りなく聞けければ嚴流も古郷へ歸らんと思ふ機會なるもへ是を幸ひと免し遣り則ち兩人を引連れ日を経て出羽の山形に歸りけれども野田の家と曰ひして豐丸成人の上家督を相續して居りまにぞ乃ち町道場を開き劍道を指南しけるが元來人望薄き者なれば掛々し門人も付かざりければ嚴流大よ不平を生玄當所の邊境の國あれば人の心も頑固よて世の英傑を知る事能はざるべし斯棟の所に埋れ居て空しく月日を送らんよりは京師より我が英名を顯はとべしとて青山門平押田佐吉お心得させ些かむかりの門弟を斷りて曰く某少しく心願の事有り京師お上り此後は一國一城の主と成せんば再び此所にと歸るまじと例の廣言を云放ちて二人の内弟子を隨がへ再び旅路へ出立しよけり

○佐々木巖流増田長盛の家にて早業手練の事

并に巖流京都表を追放せらるゝ事

然程に佐々木巖流と古郷お於て其望む所掛々しからざれを京都に出んものと思ひ起し最上を立出で道を急ぎしを日ならせして京都より着き彼地此地を尋ねて終つ松原通りにて家を買求め造作美麗にして道場を開き居たりしが幸ひと評判宜く入門する者最多く勿々賑やのにぞ暮しける茲に五奉行の一ある増田左衛門尉長盛の家臣、浮島嘉膳と云者あり一日佐々木の道場の表を過ぎ繁昌の体を見て心憎く覺へけるふぞ乞ふて試合を求めんか若し打負なば主人の名前も汚する道理を此上と表向き主人に乞ひて其上にて渠と立合んとて此趣きを願出けるにぞ長盛には之を聞かれ佐々木巖流なる者如何ほど廣言を云共畢竟浪人の身過ぎ渡世なれば良や心憎く共指て咎むるに足らず決して試合と無用たるべし併其方是非渠が技術を試みんとならむ我屋敷へ呼寄せ劍術柔術をも致させん我も幸ひ見物すべしと有あぞ茲お於て使者を佐々木が許へ遣はし日限を定めて招かれしを巖流と此趣きを聞き心中中大に悦び五奉行よりの使者なれを天晴年來の技術を見せ是より手藝を得て殿下の御師範とも成り見事大名も成べし出世の時節到来ありとて使者お對ひ懇懇に御使者の趣き畏り奉つる某の日出勤仕つるべしとて之を歸へし心中の喜悅止ざりしが已お其日にも成ければ青山門平押田佐吉の内弟子と小者一人召連れて増田が邸へ趣きけり扱も増田が邸には今日の對手には浮島嘉膳松並平兵衛の両士にて何れも覺への人物なりけるが今巖流の來りしにぞ頓て之を馬場お延き第一番に浮島出て試合しが手も無く打負け引退く次に松並と槍を以

て立合しが是亦巖流の鉄扇おて打落されけりば長盛始め從臣等互に面を見合せて其建藝なるを感稱し舌を捲てぞ居たりけり巖流は例の慢心生じ茲に於て狀を改めて曰く槍劍の勝負は是迄なり此上と弓鉄砲にても御相手に罷り成申べし何れの得物なりとも眞劍にて來り玉へ速のお受止め御覺に備へんと大膽不敵の廣言を吐けるよぞ是を聞て憎しとや思ひけん一人の者大音に申けると只今巖流の申條傍若無人なり卒や覺への強弓受て見よと躍り出る尤増田が勇臣早瀬左太夫なり巖流と鉄扇を持ちて泰然と扣へたりしが己にして三の矢どもに打落しけるよぞ増田長盛は其早業手練を大に感じ頓て巖流に褒美を與へて厚く賞美し種々響應ありて其日の夕方に返されける其後増田右衛門尉長盛に巖流が働さ凡人の所爲おあらずと思ひ大に稱美し一日殿下の御前お出仕なし巖流の働きを委し之言上致し通れ御家八人も御取立あらば一麻の御用にも立いはんと申述て執成けるを殿下と聞し召れ暫く御勤考有しが何とか思し召れけん御返答に之及ばれず増田よと暇取らするぞと上意有て其儘入御ありしかを長盛と案に相違して殿下の思し召も圖り兼又々後日に推舉致すべしとて先づ其日と退出致しける扱も佐々木巖流と増田が邸中お於て目覺し働死して褒美の賜物など有て首尾残る所あき上都合なるにぞ門人共お打對ひ其狀況を物語り必ず増田殿より殿下の上聞に達するは必定あり殿下亦一藝よ秀する者と御取立遊ばさるゝ由なれを定めて某しも御召出しに相成一万石の下し賜はるべし然れば各方にも分祿を與へん事近きに有り悦び玉へど早大名にも成濟したる心地して口外するよぞ可笑けれ恁て豊臣太閤殿下には天地を見洞英才の御眼力ましませを長盛が推舉せし佐々木巖流が様子を篤と御聞有て早之も彼が好

十四

倭高慢なる事を推量り玉ひけれを其時左右の仰出されも無く暫時程過て町奉行お申付られ
同人義思ふ仔細ければ早々京都の内を追拂ふべき由仰渡されける是に因て奉行所より巖流
が宅の家主方へ明日巖流召連れ罷り出べき旨差紙遣しけるに巖流は些不審と思へども
身形容立派み出立意氣揚々と家主同道して町奉行所へ出頭たりけり此時京都町奉行薄田隼
人正出座ありて大音に申渡されけると佐々木巖流事松原通りに住居致し殿下の御膝下ども
辨へて大なる看板を出し諸人を迷とす條不届に付屹度曲事申付べきの所格別の御憐愍を以
て京都の内追放申付るものあり今日中お引拂ひ申べしと嚴重に沙汰せられける巖流と案
に相違し只茫然として居たりけり家主は巖流を引立て松原通りに歸りける流石我慢の巖流
も門人の手前廣言吐し事あれば面目あしやや思ひけん跡の諸事を青山押田お委任つゝ其
翌朝に至り私りお大坂表へ退きけり

○吉岡無二齋有馬へ湯治に赴く事

并に巖流姫路表住居の事

愛に吉岡無二齋は永らく流浪の身にて在し又青雲の時來りて當時中國十一州の太守安藝
廣島の城主毛利右馬頭輝元朝臣お召抱へられ食祿八百石を賜はり何不足なき身の上とこそ
成りけれ元來篤實温厚の人なるにぞ専ら忠勤を勵み仕へけるが其年も早六十の上を越ゆる老
体となるお隨ひ筋骨健康ならざれば養生の爲め攝州有馬の温泉へ湯治せんと思ひ立ち此
由太守へ願ひ出けるに早速御許容有て暫時の御暇を下されけれを無二齋と大に喜び早々旅
の用意に及びける茲に於て無二齋思ふ様都て湯治と何事を氣保養を專一とせる事あれを家

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

來を召連れては却て保養にならず氣詰りなり果て如何がなと考へしが日來出入の八百屋久
助おど此度の供を命ずべしとて同人を呼よせ相談に及びしが異儀なく承知せしかば無二齋
と手當の金を與へ頼て有馬を當て出立しける恁て有馬お到り湯治に及びけるが二週日にて
湯も相應せしにや身心大に健全お成けれを湯治も最早是おて十分なり然らむ此より所々の
名所古跡を一見せばやとて宿を立出で落葉山より鼓が瀧を始め名に負ふ有馬名所を見物し
其歸るさゝ播州の名所高砂曾根の松石の寶殿姫の路天守をも途の序なれば久助に見せんと
て姫路の城下に到り福井町の旅籠屋治郎兵衛方にて暫く逗留なしけるに圖らむも無二齋不
風の心地とて打臥せる故久助と甚だ心配なし亭主治郎兵衛に相談して近所の醫師を頼み藥
を貰ひ傍らに在て看護に心を尽し在たるが是れ當分の風邪とは思はれず二十日をのりも逗
留しけり扱此久助と元原氣輕き男あるにぞ看病の暇間に之宿の手傳ひ又と小使等をも致し
ける故早晩家内の者ども心安く成りける其上此久助と子供の頑是なき者を好む俗に云ふ子
煩悩なれば宿の子の四歳おなりけるを深く愛し抱きては戶外へ出て遊ばせなごしける一日
の事例の通り久助と彼子供を連れて春戸の方へ遊び居けるに彼子供と隣家の庭より塀を越
して大きな柿の見事に熟して垂下りたるを見て頻りお欲がりしかと久助は望む所之尤も
と思へども正直者故隣家の柿を斷り無しには取れずと種々お子供を欺し賺しけれども一向
聞入ず彌々欲がりて泣けるに今と詮方なくて手を延し一つ取て與へしかを是は小さし向
ふお大いあるを取て欲しと泣入るおど久助と最と本意ならずと思へども幼兒の頻りお欲が
る事なるにぞ愛に惹かれて是非おくも傍らの石を踏臺として伸上り手を伸して取らんとす

一十四

るを豊圖らん隣家より伸したる手を無手と捕へ柿盗人と云様に細引を以て久助の腕首を柿の木に括り付くを久助と仰天し偏に御免下ささきと詫げれども其一向開入をす聲を荒らげ罵り怒りけるおど彼の子供は驚き泣出しつゝ逆歸り今伯父様が柿を取らんとして縛られしと家内の者に告げれば亭主の治郎兵衛之を聞て大に驚き是は大變なる事仕てけりと色を變て震ひけるが詮方無く頓て無二齋が居間に來りて右の次第を物語り隣りは劍術の師匠おて別して氣六ヶ敷横車を曳出してと容易お後へ引かぬ者なれば勿々一寸の相濟み申とまじと云ふを無二齋と聞て夫は扱々面倒なる事を仕出したるものかな然しながら今更是非お及む卒御手前亭主役ゆへ太儀に有べけれども隣家へ行て能様に詫言して給とるべし且又某が家來たる事は決して申べからせ武士と聞おは猶々容易に承知致すまじけれ此趣死能々心得られて如何様おも宜き様に申繕ひ詫言申て呉られと又餘儀なくも頼まれて亭主の治郎兵衛之甚だ足は進まねども元是我子を愛するより起因し事おれを仰畏りいど頓て羽織袴を着けて隣家を當て趣ける扱も此旅籠屋の隣家の主人と云ふは他人からせ是は彼佐々木巖流にて先死に殿下の命下りて京都町奉行より京都住居を追立られ追放の身と成けるゆへ先づ中國筋へ趣のんとて此姫路お來りけるが當所と其始め太閤殿下が未だ羽柴筑前守と稱せし時に築き増れし城郭おて織田右大臣存生の比に此地に居住在けるよど土地繁昌おて家中町なとも甚だ多ければ今御一門木下少將殿の御領地とはなりけり恁いけきと卒や此地お足を止めて道場を開くべしと扱こそ當家を借求めたるなり然るに幸にして藩中の門弟も益々多く終には城主木下勝俊殿へも御師範申を程にぞ成にける扱も

此日は徒然にてあれを庭先おを逍遙し青山門平お差圖して庭州などを指捨させける處に手を延して柿を取らんと爲す者有にぞ青山透さず其手を取り柿の木へ縛りけるを見て巖流と門平に向ひ益もなき悪戯事おれを早免し遣はすべしと宥めけれども門平更に聞入れず先生と餘り御心好と申すものあり假令僅かの菓物と云へ他人の庭前お在る物を垣越しお取らんとと言語同斷の舉動なり己後の見懲めおいへば此儘に成し置かるべし今に詫言を來るべければ其時懲しめの爲め巖敷御叱り有て以來を屹度戒め給へと煽動けるにぞ巖流も亦小首を傾け如何にも其方の申所一理おさにも非さざる其時宿すも晩おらとて人の來れおしとて待居たりけり

○無二齋巖流に久助の兎忽を詫る事

并に吉岡佐々木龜島お於て試合の事

恁て旅籠屋治郎兵衛は隣家ある佐々木巖流が方に入來り案内して扣居たれを此趣きを聞くとより巖流は徐々として立出治郎兵衛に向ひて曰く我今日庭前に居し所隣家より擧越しに柿を取んとせしと其方の家の召使ひか但し又旅客なるや何れにもせと其方が行届かざる故なりとて面色を變て叱りけれを治郎兵衛は大に怖れ誠申譯も御座なく元より私の不調法あり併し兎忽仕りいし召使にとあれおく逗留の旅人にていねを何卒御聞濟下され御宥しの程願ひ奉つると申せば巖流猶も聲高に何旅人なりとや而て其旅人と武士あるや又と町人百姓ありや此方に於て屹度處分あり眞直よすすべしと云これ亭主は威光に恐れ虚言を云へん又如何なる災難に逢んも知れずと云へ吉岡の申含めおれを迂濶おは云へきとて暫時猶

四十四

宮本武藏英勇傳

豫しが否と正直お云とねを如何様の奇き目に逢んも知れどて其旅人として則ち武士にてい
 と答ふ巖流押返して曰く而て姓名と何と何れの藩中なりやと尋ねられ唯毛利様の藩中にて
 吉岡無二齋と申方の御家來にていと聞て巖流と扱中にて剣道名譽の達人西國筋塚が上
 に立つ者無しと稱せられし吉岡にて在しか我今此地にて斯斗り聲譽を得ながら今吉岡と聞
 て早速に其家來の鹿忽を宥しなば諸人の嘲り我名汚あり今日不圖渠に關係こそ幸ひ家來の
 鹿忽を質として試合を望むべしと心を決めければ治郎兵衛が種々に詫るをも聞入れず扱と
 豫て噂に聞及ぶ吉岡氏とや家來の不届なれを自身に來つて詫致さるべきの當然なるお人を
 頼むとは近頃我を侮むのし不禮の振舞なり此上は吉岡氏自身に詫致されいへば兎も角も人
 頼みにてと決して開濟難しと承知する景色あらざれを治郎兵衛と今更後悔せしが是非無
 歸りて右の次第を無二齋に語りける無二齋之を聞き扱と面倒なる事なり夫故よよそ我名を
 決して云べからずと口留めせしとあり併し今更是非もあしとて乃ち衣服を改め巖流の方に
 到り對面して云様某儀と毛利右馬頭家來吉岡無二齋と申者なり此中病氣に取合御隣家お返
 留の所先刻家來の鹿忽不調法仕つりいお付宿の亭主を以て御詫仕つりし處御開濟之なく尤
 も拙者參上仕つり御詫致しなむ品により御勘弁これ有べきとの事因て御辭に付直ちに參上
 仕つり御詫び申述い何卒家來の鹿忽御宥し下され度と叮嚀よ詫けれ巖流と詞を和らげ是
 とく御挨拶の段痛入い元來御家來の鹿忽は些細の事なるよ御叮嚀の御詞某却つて赤面仕
 つる扱御高名は豫て承りい日本第一の御手練と聞及びいへを一度の拜顔も致し度と望み居
 りしに今日圖らざる對面に及ぶ事大慶此上あくい某不肖ながら日本一の看板を掲げ置い故



佐々木岸流
 吉岡無二齋
 龜嶋不於て
 試合を為す

吉岡無二齋

巖流こそ日本一とやらんと云ふ評判なり故に今日の對面こそ實に幸ひ其許と一手の試合致し手練の程を試し何れが日本一なるや天下劍道の分目の勝負仕つり度願ひなり御立合下さらば大慶なりと望みける無二齋の心の中に巖流の詞の端取るに足らずと思ひしが故意と詞を卑ふし某元來未熟の業めて其上御覽の如く老年に相成ば貴殿との立合思ひもよらず斯申から立合すとも某が負たるも同前にて貴殿こそ日本一なれ試合の儀は御用捨下さるべしと辭退す巖流勿く承引せむ左様御辭退の上と些細の事ながら御家來の龜忽と宥し難しと退引させぬ言分に吉岡も此上と是非なく右様の思召なれば家來の難義は見捨て難し御相手に成り申べし然ながら某も仕官の身の上私よと勝負致し難ければ御領主木下侯へ願ひを立其上にて試合仕つるべしと返答しければ巖流も是は道理なる次第某は御領主へ御師範仕つれを試合の義は早速御聞届相成べし先づ御家來を宥し申べしとて久助が縛めを解き無二齋も渡しける扱も無二齋と一先づ其旅宿に歸り亭主にも右の次第を物語り直ちに領主木下侯へ願書を差出しけるが元より少將勝俊朝臣の殊れ外巖流を最負にて其上指南を請らるゝ事故早速許容ありて當所龜島に於て試合すべしと命せられける此龜島と云は二町四方の小島みて姫路より近き海上に在る故試合と明日の巳の刻と相定められ木下侯より檢使として雨森縫殿助正木采女の兩人其他警固の役人一齊龜島へ渡りける佐々木巖流と内弟子青山門平押田佐吉を召連れ島に到り檢使に一禮し床几に懸りて無二齋の來るを待居たり些時して無二齋と久助召連れ小船より乗りて出來り頓て上陸して檢使の両士へ式禮し其後佐々木吉岡互ふ挨拶終り作法の如く双方左右へ立分れける去る程に此噂姫路の四方へ聞へければ城下と云

傳勇英藏武本宮

傳勇英藏武本宮

に及む近村の老若天下名譽の劍術者が試合を見んとて集ひ來れ龜島の周圍は小船を以て圍繞たり佐々木巖流と身の丈六尺一寸筋首逞しく面は美玉の如く肉肥し美男あて手に三尺の木劍を携へ立上る有様如何なる天魔鬼神ありとも取挫ぐべき氣色なり又吉岡無二齋と身丈漸五尺餘りにて年頃積て六十一歳頭は半白の柔和なる老人豫て極めたる一尺二寸の木劍を引提げ徐々と立上る見物の諸人此躰を見て皆も哀や彼老人と只一打お倒されて終は息の根も止るべしと手に汗握り鳴を静めて見物す然ども無二齋は怖るゝ色なく立向へを巖流は聲懸け三尺の木劍を三段お構ひ立上れば此方は僅か一尺二寸の木劍を青眼お着しが双方開へし達人あれを互に隙を窺ひて暫時位を取合しが佐々木は隙をや見出しけん大喝一聲叫ぶと見へしに上段より鉄壁も碎けよと打下す其太刀先に嗟呼や無二齋は全身微塵お成つらんと見るよ然となく翻然と之を引外し左手の方より付入れば巖流は打漏したるか殘念やと氣を焦ち一足進んで又打込むを無二齋木劍めて廢止と請止め尙も丁々廢止と打合せ虚々實々秘術を盡と双方の其早死と石火陽炎の如く目を留て見る事能はされば檢使を始め見物一齊酔へるが如く瞻居たりけり斯て両勇は飛鳥に等く着廻りしが無二齋電光の如く跳込むよと見る間巖流が肩尖を發止と打て飛退り禮をさせ巖流と這と無念と云さま其虚を打んと飛込むを無二齋再び右へ翻して直と着入両小手を十分打けるに流石の巖流も木劍を持耐へせ大地へ憂然と取落し今は前後を忘却しの不禮を思はず投殺さんと無二無三に掴み懸れを無二齋は搔潜りさまに飛來る大の男を物の見事に引擔き片膝折敷ながら一聲叫んで三間ばかり向ふの方へ投付たり是を見るより見物の諸人と大お驚き凡夫業にと豈夫

七十四

有まじ仕たりくと手を叩き譽稱ふる聲と山海の響き暫時の鳴も止さりけり無二齋は徐かに衣紋を直し巖流に對ひ勝負は時の運よして敢て優劣是にて極まりしと云に非ず勿々適れの御手際なりと挨拶し檢使は向ひて御出役御苦勞も存せる旨を一禮し頓て小船に乘移り旅宿を當て歸るや否直ちに姫路を出立なし道中を急ぎて日ならず廣島に歸りけり

○佐々木巖流姫路表を退去の事
并に吉岡無二齋を暗殺する事

扱も佐々木巖流ハ其身の藝ハ驕慢一吉岡ハ辭するをも聞かず我より求めて試合せしが手を無く初太刀ハ打れしを猶懲すまに立對しか是又立派に打負て尙は投着られし尾籠の現狀檢使ハ始め門人の手前見物の目前其面目を失ひし事無念骨髓に徹せしか少しも吉岡ハ恨むる氣色を顯さず檢使門弟に打對ひ御覽の通り未熟の業にていへを勿々以て大守の御師範相成がたし此段宜しく仰上らさるべし付ては門弟の方々も某は尙此上諸國を修行せんと欲すれを指南の儀と以後御斷申なり只今己に吉岡殿の爲み打据られしと我身の幸ひ之も過ぎず又々熟練仕つらむ重ねて御當地へ立歸り御指南を致すべしとて一同へ挨拶して乃ち其日に道場を仕舞ひ内弟子なる青山押田の兩人へ暇を遣と一其翌日只一人姫路を發足して何國とも無之出行ける斯て佐々木巖流は無念の程片時を忘るゝ隙なく唯一人忍びて安藝國廣島に赴き如何にもして無二齋を討果さんとの密のよ様子を窺ひけるが當時八百石の主なれば他出の際には供廻り多く殊更武術鍛練の者なれを勿々容易討取る事叶ひ難し如何は爲んど種々と肺肝を碎き工夫を廻しける茲に廣島の城下外れに今戸と云地あり此邊の面一

棒堤にて非人輩多く小屋を掛け住居けるを巖流乃ち我謀計と此處に在とて漸々一計を思ひ付我七日の間志す事有とて非人乞食に錢を與へ又之焼飯其翌日と酒肴などを喰としめ其張臆を試し其中より四人の者を見出し我等其方共に折入て頼み度一條ありとて片邊りへ呼寄せ當所に吉岡無二齋と申す劍術者の在る由なるが其方共存じ居るや何存じ有るとか夫と重疊其儀ハ付汝等我が爲に力と爲て貰ひ度しと云へ非人輩と大に駭き其所以を問ふ巖流曰之渠ハ即ち我爲に親の敵なり然れ共彼武術の達人と云ひ殊ハ家來を夥多ある由を踏込で討取る事能はず返り討となると必定あり是に因て渠が他行したる時に討取らんと思へり故に汝等我が爲に隠し目付と爲り吉岡が他出を聞出しなば我等方へ知らせ呉られたし旅宿と斯様々々の所なりと耳に口々せ私語知らせ何卒我に孝道を立させ呉と是と當座の褒美なりとて金子一兩宛與へけれを非人輩は大に悦び何が扱御親父の仇討とあれば何ぞ御詞違背致すべき明日より心を配り聞出し次第早速御知らせ申べしとて異儀なく承知したりけり巖流は大に悦び此後と只其報知を待居たりけり却説吉岡無二齋ハ平生忠勤怠りなく且つ先達て姫路に於て佐々木巖流に打勝ち諸人の稱讚を得たること輝元卿の聞お達し猶又百石の加増ありて都合九百石となり益主公の心に適ひ一家中の尊敬大方からざりし一日門弟なる田子權左衛門方より明日猿樂の興行を致すに付先生おを御入來を願ふ趣申來るに付此時無二齋は悴清三郎長々の病氣おて一時は危篤き容跡ありしが此節少し快氣おて少しは無二齋も安堵せしよ久々の看病にて心癒したれを參向致すべき由返事おし斯て其日と若黨草履取の兩人を召連れ今戸堤を過て行程二里餘の道を急ぎ田子が方にぞ赴ける非人共は此

躰を見るより直ち、巖流の宿所に到り相圖を以て呼出し右の次第を物語り道筋を今戸堤なるを告げれば佐々木は大に悦び汝等が志し悉けなし後刻禮を致すべしとて夫より早々用意に及び無二齋が歸途を討んとて今戸堤の土橋の下にて待居たりける扱も吉岡無二齋は神ならぬ身の哀しさも我を窺ふ者有とも知らずして其日の能も終ければ卒歸へらんと辭しけるを田子は只管之を止め先生之常に無き御銘町にも見請けらるれば今宵は拙宅に御一宿ありて明朝御歸邸然るべしと勸ひせども強て歸ると云つゝも老の一徹止まる氣色なく田子許りて歸途お付けり頼て今戸堤へ差掛り井筒のクセを謠ひ乍ら今や土橋を渡らんとす其時後邊お入有て吉岡無二齋姫路にての恨み思ひ知れと呼はれを無二齋入心得たりとて刀の柄に手を懸て振向く處を豫てより狙ひ設けし種が島火蓋を切て放てば過たず吉岡が背骨より胸元おけて打抜たり汝卑怯者奴と只一聲流石の無二齋も灸所の痛手に堪へ兼ね血煙り立て仆れ伏す若黨は此躰を見るより飛道具を以て主人を害せし卑怯者め遁さしとて無二無三に切て蒐れば巖流を抜合せ小瘡者奴と云ながら流と刀を横に拂へ若黨は腰の番を切放され而段と成て失たりけり小者之期と見るより跡をも見ずして逸趁お城下を當て逃行けり巖流莞爾と打笑ひ無二齋が胸元を乗掛り止めの一刀差貫し行方知れ逃失たり小者は屋敷へ逃歸す此凶變を慌忙し之始終の趣きを注進し及べを長男清三郎未だ病氣にて歩行を自由あらねども父が横死と聞より大に驚き杖に縋りて早くも其場に到りて見れば敵は最早逃失て其影だに見ゆず父の死骸お直と寄り添ひ悲歎の涙籠の如く無慙や卑怯の飛道具あて斯も落命し玉ひし如何ある者の仕業あるや其上若黨迄も殺害せられし事無念の至りと拳を握り

宮本武藏英勇傳

齒がみをなし天を仰ぎ地お伏し暫時正躰無りしが漸心を取直し父と家來の死骸を引取り懇切に野邊の送りを營み終て主人輝元朝臣へ斯と訴へければ元より寵臣の事あれば殊の外驚かれ其曲者未だ遠くと逃去まじとて早々役人共へ申付られ出口々々を取固み嚴敷詮議致されければ其行方終に知れざりけり清三郎と病後と云ひ豫て多病の生れおれども俱不載天の父の仇敵堪忍し難く敵討の願書を差出しけるに太守は之を御許容なく子として父の仇を報せんと願ふ事人たる者の道なれど清三郎事と豫々病氣と云ひ殊に虚弱の生れおて勿々に敵討は相成まぞ万一反り討と相成か然あくとも途中に於て雨露霜雪の爲お身を冒され徒らに空を成べき事杯わらば我お於ても無念お無念を重ぬる道理おれを此願許容相成難し豫て聞及ぶ無二齋未だ我お仕わざりし節他家へ養子に遣としたる次男之ある由是を以て仇を討む宜しからんとの御差圖お清三郎に只我身の病身あるを悔み歎き且主命黙止難く思ひ夫より父の横死の趣き并に主命の次第を委しく相認めて肥後熊本なる舍弟七之助が方へぞ送りける

○宮本七之助實父の敵討を願ふ事

并に清正理言武者修行を免し武藏と改名せしむる事

扱も宮本七之助は安藝廣島なる父の許より兄清三郎が急使の書面到來しけるにぞ不審く思へども披て讀めば云々との文体なるよど以て外に驚死歎き直様養父武左衛門に右の書面を見せて曰く斯の如きの次第に御座し私し養子の身を以て推て願ひ奉つるに本意おらずいへども如何よも殘念よもいへも何卒實父の讐を報じ度存じし報仇の儀偏に御許し下さるべし

二十五

と思ひ入て申けれを武左衛門も大いに駭き愁傷し我とても舊好深き無二齋殿の横死實に無念少なからず然れども早速には差許し難し其儀と第一主人を蔑如にするに當れを一先づ主君へ此事を願ひし上御差圖に従ひて事をなすより外有るべからざと即時に願書を認め此儀を願ひ出けれを清正朝臣の頼て兩人を召され最不興の氣色あて申さるゝ様此度吉岡無二齋が横死に付汝等が愁傷推察致す所なり付ては七之助が孝心感ずるお餘りあり然乍ら一度我が家臣の養子と成し上と七之助は是我が家來なり我が家來を以て他家の臣たる無二齋が仇討を致さす事と許し難しコリヤ七之助其方と養家を重しとするや又實家が重きや抑を敵を討み一命を的お懸て其身を無き物と致さいれを叶はざる事なり其方命と豫て我あ差出し置しならずや万一反り討にも相成らる我への命は何を以て償ふと思へるぞ決して此事許し難しとて以ての外の氣色あるにぞ宮本父子とハット赤面し當然の尊命恐れ入奉つると宵々として退出し我邸に歸り互に額を集めて其も仇討の事如何はせんと思ふ所へ引續きて主人清正殿よの使者として近習大沼半三郎入來して主君の命を傳へける其趣きと七之助事實父養父の術を捨てて自ら工夫して二刀を遣ひ出し其術を以て十字と受留る時と盤石の如く如何なる者も勝を取る事能とざる由是に依て其業を唯今一覽すべきに付早々登城致すべしと有るにぞ七之助と畏り奉つる旨御請致し大沼を歸しける跡にて心中大お怪しみ父武左衛門に向ひ只今主君の御前にて御不興を蒙り退くや否即時に劍法御上覽の御使を蒙る事何共不審の至りなり首尾如何有べしと胸を痛めける武左衛門曰く其方然のみ心配する事勿き我君は仁惠深と神智ふまませを定めて何か深き思召の有事ならん早々罷り出るが宜かるべし

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

と父子打連れ登城致しるるお近習の士出迎へて直ちに馬場へ案内す此時馬見所の正面より主人清正朝臣出席あり其左右には加藤森本木村井上飯田庄林等の殊に名高き二十八雄の面々列を正して並居たり時に七之助の相手誰彼と評議ありしが木村又藏の曰く甲乙と申さんより兎も角拙者七之助の相手仕つらんと申けるに清正朝臣木村の相手とい誠然るべし七之助に於ても嘸本望ならん然心得よとあれば木村の即ち馬場お下り立ち一禮をなす三尺の木劍を上段に構へて立向ふ七之助は二尺三寸に一尺二寸の二振の木劍を左右に構へ立上る双方互に秘術を盡し暫時が程と試合しが木村が打んとすれば宮本の彼十字で受け七之助一刀外して切込んとすれと又藏左右あく寄付を清正聲を掛られて七之助両刀の手練見極めたり其變化は如何と仰有れを畏り奉つるとて即時に十字は變じて天地陰陽の兩段に構へたり木村は猶も打入らんと覗へども一分一厘の隙なければ打下す事能とざり是に於て清正は兩人を押止め勝負を決するお及ばず兩人物別よせよと申されを木村宮本左右お別かれ各式禮をなしよける是に於て清正始め二十八雄の面々誠な奇代の妙術なりとて大に感稱えたりけり清正は七之助を召れ汝が工夫の両刀今一覽して駭死入りたり然れども世の中廣し如何なる達人有らんも計り難けれを今より猶日本國中を武者修行して優れたる者あらば從ふて師と頼み劣れるものは取立て得さすべし偕又劍法の勝負は相手に因てと眞劍にても若しからず勝手次第致すべし是と予が秘藏の刀あれを今日の褒美に其方に遺すなりと手自ら志津三郎兼氏の名刀を賜り且つ今日より七之助を改め武藏と名乗べし是武道を藏むと云義を以て稱美するなり又予が諱の一字を與へ正明と名乗れと仰あるにぞ宮本父子と君恩の有難さ胸

三十五

と父子打連れ登城致しるるお近習の士出迎へて直ちに馬場へ案内す此時馬見所の正面より主人清正朝臣出席あり其左右には加藤森本木村井上飯田庄林等の殊に名高き二十八雄の面々列を正して並居たり時に七之助の相手誰彼と評議ありしが木村又藏の曰く甲乙と申さんより兎も角拙者七之助の相手仕つらんと申けるに清正朝臣木村の相手とい誠然るべし七之助に於ても嘸本望ならん然心得よとあれば木村の即ち馬場お下り立ち一禮をなす三尺の木劍を上段に構へて立向ふ七之助は二尺三寸に一尺二寸の二振の木劍を左右に構へ立上る双方互に秘術を盡し暫時が程と試合しが木村が打んとすれば宮本の彼十字で受け七之助一刀外して切込んとすれと又藏左右あく寄付を清正聲を掛られて七之助両刀の手練見極めたり其變化は如何と仰有れを畏り奉つるとて即時に十字は變じて天地陰陽の兩段に構へたり木村は猶も打入らんと覗へども一分一厘の隙なければ打下す事能とざり是に於て清正は兩人を押止め勝負を決するお及ばず兩人物別よせよと申されを木村宮本左右お別かれ各式禮をなしよける是に於て清正始め二十八雄の面々誠な奇代の妙術なりとて大に感稱えたりけり清正は七之助を召れ汝が工夫の両刀今一覽して駭死入りたり然れども世の中廣し如何なる達人有らんも計り難けれを今より猶日本國中を武者修行して優れたる者あらば從ふて師と頼み劣れるものは取立て得さすべし偕又劍法の勝負は相手に因てと眞劍にても若しからず勝手次第致すべし是と予が秘藏の刀あれを今日の褒美に其方に遺すなりと手自ら志津三郎兼氏の名刀を賜り且つ今日より七之助を改め武藏と名乗べし是武道を藏むと云義を以て稱美するなり又予が諱の一字を與へ正明と名乗れと仰あるにぞ宮本父子と君恩の有難さ胸

に充ち感涙暫時は止ざりし乃ち御禮申上げ退出なし是より武藏と即時旅の用意を整へ改めて御暇乞申して其翌日養父武左衛門にも暇を告て立出ければ養父を交々門出を祝し城下外れ迄見送りけり

○宮本武藏武者修行出立の事

并小諸岡一羽と試合の事

扱も宮本武藏正明は主君加藤清正より首尾能く暇を給はりければ熊本を立出一先づ安藝國廣島に到り兄吉岡清三郎と對面し互に此年月の物語りを爲し父が横死の無念を歎き先づ兄弟諸共に亡父の墓前に詣りて追善を營み俱不戴天の仇を復せん事を告げ夫より敵討の相談お及び當夜遊歸りし小者に現場の状況を具に聞取り思案を凝しければ清三郎曰く父上勿々人と物争ひあどして憎みを受玉ふ性質ならず是は必き偏執の者が仕業お相違有ま夫に付思當る事は先達て有馬へ湯治に赴かれ其歸途病氣お依て姫路福井町の旅籠屋治郎兵衛方お逗留中圖らずも下人久助が倉忽より終に龜島お於て佐々木巖流と云へる者と試合に及たれ打勝ち給ひしが若や此巖流の仕業おても有らんか是とて確としたる証據有に非らず尤も其子細と斯様々々あり且其久助は目今當地に在らる其時聞置し佐々木が容貌と云々あり先づ手掛いと云ふは是のみありと云ふ武藏は是を聞て心に合點聞くが如きと其佐々木巖流なる者に恐らく相違と有まじ去來と明朝と此表を發足すべし舍兒保養を加へて病を養ひ玉へと當夜と殊更親睦に尙行末の事共談合て明くれ心廣島を出立し段々中國筋を尋ね廻れとせ更手掛りあらざれば夫より三丹州に入り北國よ出で出羽奥州へと志し主君が仁慈の御下

知とは云へ敵討は私にて表と武道の修行されと有名の劍術者には至る所其門を叩て試合を求めける此時世に知をたる名人と云ふは塚原卜傳同甥塚原小才治伊藤一刀齋柳生宗矩諸岡一羽吉岡兼房寶藏院胤榮小野治郎左衛門田宮頼母竹内加賀助等の人人々なり憚て武藏と出羽國鳥海山に來り靈神に詣でんとて登山し峯るが此山中よ於て強盜の張本秋山十郎教定を討取り尙は深山に迷ひて一軒の白亭に變化の者を仕留め漸々おし常陸國江戸ヶ崎にぞ來いける此所にと劍道の達人諸岡一羽とて其頃七十歳斗りの老人あり此人の高弟に岩間小熊之助土子泥之助根岸兎角之助とて孰れも一流の奥を究めたる拔群の達人なるおぞ諸人と諸岡が三助と稱して其業を許したりける武藏と諸岡が道場に來りて案内を乞ひ試合を望みけるが當時諸岡が門人は三百餘人の多人數にて一羽は只今稽古を教ゆる最中なりしが斯と聞より門弟の稽古を止め武藏と對面して曰く客人の芳名豫々傳へ承これり何卒一度と御太刀筋拜見致し度存じ居りしに今日の來臨は千歳の一時なり併しなごら御邊とても某とても同く劍道を學ぶ事故其流義お違へ其水原は一流にして唯剛應と進退の差別有のみ願くとく御立合下されたし誰の御相手を致させ申さんどて席中を見廻しければ此時門弟小柴早太進み出未熟ながら某し御相手を致し申さんどて支度をなし木劍を以て立向ふ武藏と兩刀よて立合し十字に受留ると見れを忽ち早太が木劍を絡んで中天よ刎揚げ一刀おて肩先を發矢と打ち其儘飛退りて失禮御免と禮義に及ぶ一羽は是を熟々見て思はる聲を揚げ天晴見事なる御手の中勿く小柴が如き者の御相手よあらずと云ふ又一入進み出ると土子泥之助なり諸岡が門弟中にて三番と下らぬ者なるが武藏お向ひ願くは某しに一手の教授を給へと一禮なし早

六十五

くも木劍翳して進み來る武藏も同じく兩刀あて立向ふ泥之助と小柴が如きに非ざれを暫く
隙を見合せて位を取て居たりしが武藏が隙をや見出しけん一聲叫んで打下すを彼十字ふて
受留めしが宛然漆膠を以て着たる如く離れねば土子と種ふ急れども更お捌く事能はせ暫
く争ひける内武藏は左劍を外すと見る間に土子が腰を丁と打て飛退き前の如く禮をなしけ
れば此時一羽は彌感心なし扱ふ恐入たる御手の中此上と老躰ながら某し御相手仕つるべ
しと七十歳の翁なれども太刀を取ては無双の達人今迄曲りし腰も伸て壯年の如くなれを宮
本も大に悦び有難き先生の御指南某しの幸ひ此上や有べきと一禮あ及で立向ふに諸岡と青
眼に付て構へ宮本と天地兩段に構わたり扱名人と名人の太刀筋成を一點の隙間なく暫時互
に白眼合しが一聲の氣合を入ると一齊一羽が青眼の變じて上段となり武藏が天地は變トて
左右へ別れて長蛇の構へとなる時に又一羽が上段變えて地摺の青眼にて詰寄せければ此方
は長蛇變じて左右合し一體半身お構へたり爰に於て諸岡は木劍を投捨て禮をなしけるおぞ
武藏も同じく兩刀を側に差置き頭を下げて叮嚀お禮義をば述べたりける諸岡は宮本の手を取
て座敷に誘引誠に御邊の御太刀筋變化自在なる事感するお餘あり某し此年よ及ぶ數百人の
術を試めども此の如き神妙の劍術を見せ實お今日が甫めありと云ふよど武藏曰く這と先生
の御賞美に預りて恥入い未だ口廣き申條ながら某も亦國々を修行せしに未だ先生の如き名
人の太刀筋を見申さず今日幸ひにして御指南に預り大慶此上なくいと云ふ一羽否々拙死思
老が劍道恥のしき次第なり某未だ若年の時同ト門下の劍道お遊びし友にて塚原卜傳と云者
ありしが今と深山に引籠りて世の人に交る事を厭ふと承くる思ふに今御邊の上に出る者天

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

下廣しと雖も此卜傳ならで外に有まじ又一入天下の名人と云はれし伊藤一刀齋あれども是
と世を捨て其行方を知る者なし因て只今にても慥に世に在る者塚原卜傳而已なりと云ふ宮
本曰く某も日頃此兩雄の名譽を傳へ承りたれば何卒一度は面會致度き望みありしも未だ其
實を知らざりしお今先生の御物語りを承りて始めて知る悦び何事か之に過トとて大に喜悅
し夫より兩人は劍道の意味を論じ翌朝一羽の留むるを辞して武藏の國へを趣きける

○武藏有馬喜兵衛方に食を乞ふ事
并に喜兵衛十字を破る工夫の事

恁て宮本武藏は思案すらく武藏國江戸の地え徳川家の本城にて武家繁昌の土地なれば京大
坂にも優るべき景氣ゆる一先づ江戸お到りて巖流の行衛を尋ねんものどて頼て江戸お來り
しが爰に亡父吉岡無二齋の高弟高山文吾と云者今と徳川家の旗本の士となり江戸に住居け
る由豫て聞知れば此高山が許に尋ね來りて暫時當家に逗留し處々方々と尋ね廻りしかども
更お巖流の在家知れざるにより今とて高山に暇を告げ江戸を出立して東海道筋へ趣き道
々武道の修行して上方に出で京都大坂の兩地に逗留して諸所を搜索ぬれども亦其手掛りを
得ず元來佐々木巖流と姫路に居住せしとの事あれば彼所へ立越なを若しや手懸りも有んか
と道を早めて播磨の國を志し姫路の城下に到りければ福井町にて旅宿を求めしは是や先年
亡父無二齋の逗留せし彼の笹屋治郎兵衛が家なり武藏と斯る事とは知らずして宿お着き酒
など申付扱て亭主治郎兵衛を招きて餘所ながら巖流が事を尋ねけるに治郎兵衛は何の心も
なく先年無二齋と巖流の兩人が龜島よ於て試合せし事など物語り彼佐々木巖流殿と當御領

七十五

主木下侯の御師範をも致され當所にて門弟も數多有しが未だ修行足らざるかして無二齋に打負しより猶も諸國を修行せし達人とも相あらば再び歸り來るべしとて當所を立退れたり然ども其後と一度の音信もなくいと逐一物語りけるを宮本は聞て心に思ふ様巖流は元木下家の師範と云ひ又門弟も數多あるとの事なれば再び此所へ歸り來る事必定あり然なくとも何ぞ手掛りと成る事を有んの宜く先づ暫く此家に逗留なし居らんとて笹屋方お足を止めて先づ當國の名所を巡覽して手筋を得んとて種々心を苦しめけるが是ぞと思ふ事も無之且つ巖流の當地に在ざる事分明なれを卒や是より有馬に赴き諸國の武士が入込場を尋ねんとて笹屋を起ちて攝津の國ある有馬を當て赴きし如何としけん山道お迷ひ入り往ども行ども山をのり樵夫の道も得ざるにぞ是よは甚だ困じけるが今將た爲べき様なれを今宵と樹木の下よ夜を明さんとて小枝枯草などを拾ひ集め終夜焚火をして詫しくも當夜を明けしけり恠て夜も明けしれを今日こそ人里ある方よ出んとて志す方へ足を向け谷を傳ひ岸を攀ぢ岩を越へつゝ歩みしが其日も已よ未刻下り今漸くにして往來に出たるよぞ大に心の安まるに付又更に空腹堪がたけれと只人家の近付くを力めて精神を鼓して歩みけるが忽ちよして木剣を打合する音の烈しく聞へけるにぞ大に悦び是ぞ劍術者の道場ならん卒立寄て一飯を乞ふものと喘ぎあへぎ尋ね行くお劍術師範有馬喜兵衛と云表札の掲げ有にぞ扱て我十三歳の時木剣おて打殺しける喜平治が身寄の者おて在らんか何もせよ此家お立寄一飯を乞受け飢を凌ぐべしと思ひしかば其儘玄關お差掛りて案内し山中に迷ひ甚だ腹中飢に及びて忍び難し因て何卒一飯の御合力に預り度と存じ斯推參仕つり此段宜しく先生へ御披露

下されよと申ける取次の者お斯と喜兵衛に通じければ有馬は立出で宮本に對面し日本武者修行の由を聞き叮嚀に取扱ひ御心置なく食事致されよとて直様門弟に云付て膳部を出せを宮本の空腹極りし折柄おて思はせも大食し頓て満腹せしめど悦を述べにける喜兵衛と宮本に對ひ御邊武者修行と在れを定めて劍道は勝れ玉ふべし幸に御太刀筋拜見致度存せざるあり御流義と何を致されしやと問ふ宮本は神明二刀流にいと答ふ扱は左様にていと二刀流は宮本氏初めて工夫し考へ出されし流義なり御邊は宮本氏の門弟方おいと問ふ然をなり其宮本は即ち某ありと云けるを有馬は聞より心中大に驚き扱ひ先年我が養父を討し七之助今此處おて況哉我家へ來るよ幸なき試合よ事よせ討取らんと思ひければ二刀の元祖宮本氏おていとや今日の面會祝着お然らば猶以て御邊の術を一見仕つり度し誰かある門弟衆卒御相手申さるべしと云へども天下お名高き宮本と聞て我立會んと云者なれを喜兵衛は思慮を廻らすお二刀の元祖たりとて恐るゝに足らず兎に角もして勝負を決し叶はざる時は偽りの謀計を以て討取んと心を定め先然ば御相手申べしと稽古場に案内し有馬と三尺心かりの木剣を以て立向ふ宮本は例の二刀を左右に持ち天地に構ひたり有馬上段より打下せを宮本十字よて受止たり喜兵衛是は無念なりと懐中へ隠し持たる短刀を抜き早く投付れば武藏と左劍を以て受止め右の木刀にて喜兵衛の肩先に打込たり是と強く打つ時は殺すべき處おれども一膳の合力を受し思もあれを態と手の中を扣へて打たりしなり打れて喜兵衛と尻居よ仆るれを武藏と退き禮を爲し徐々此所を立出ける即ち此所は有馬の入口ありけるにぞ頓て湯治場お到り去るべき旅宿を求めて逗留し浴客に目を着て敵の手掛りを求めける扱

も有馬喜兵衛と武藏が爲に手強く打据られ氣絶せしが門弟共の介抱みて漸々と正氣に立歸り拳を握り切齒をなし口惜や残念や正し武藏は養父の敵なるお討得ざることを安らね然れど武藏が得たる武術に之勿々我等如き者の容易に討取事叶ふまじ因て今より道場を仕舞ひ劍道彌熟練せし上にて渠を討取べしと心を決めければ門弟中に對ひ「父喜平治が姫路お於て討れし次第を物語り門弟中お暇乞して有馬の山中より引籠り居て宮本が十字の構を打破らんと木劍を以て木の枝を打割る事を稽古爲しぬ斯する事數年おて其功積りしかを大に熟練して今は木劍にて爪を割る如くに木の股を割けるを其近邊の樵夫共大お之を賞しける喜兵衛亦立木の股を割時の一聲叫びて飛上り木劍にて打落ると宛然斧を以て切が如く熟練しければ爰に於て喜兵衛と限り無く悦び今は宮本お出會たりとも恐るゝ事無しと思ひ近日宮本の跡を尋ねん爲め發足せんと心を決めける扱又爰に琵琶道人と云人あり是と彼宮本武藏が叔父香勝寺おてぞ有ける先年宮本武左衛門が詞お隨ひ有馬が追手を避けて寺を出しより身を雲水の定め無きお任せて心を練りたるに益々禪機の妙を得たりける是よりは常々樂しみとせざる琵琶を弄び浮世の煩としたを斷ち山水の風景を愛で心に適ふ所おわれ乃ち其所お座臥して琵琶を弾いて遊びけり此を以て世人と琵琶道人と稱して尊とびける是より先き此有馬の山中に心よ適ふ風景おを終夜彈きて樂しみ夜明ぬれを飄然として出去る一日喜兵衛は例の如く一心不乱に木の股を割て在しに後邊にて大に笑ふ者あり駭きて振替り見れば彼琵琶道人なり有馬と一禮を爲して其所以を問ふ道人曰く御身一心に木の股を割るは如何ある仔細にやと問返す喜兵衛は包む事無く敵討の由を委曲に物語れを道人曰く我

武術は知らねども御身熟練して木の股を割とも木の股おと心術無し彼十字の構を心術あり故に木の股とは同玄からせ夫心術の心を以て構を打てば益々強く弱ければ夫お應に依て強きを以て弱きを討つ心術なくては叶ふべからせと有馬は暫時打案し強きを以て弱きを打とは如何ある事よていやと尋ねけるに道人笑つて其手練る木の股を鐮にて半引切糸を以て是を釣り揚置き木刀を以て打に糸を絶せして木の股割る是を剛を以て弱を割るの心術と申すありと教へ飄々然として立去りける喜兵衛は是を聞て大いに感腹なし彼の道人え凡人に有べらるる我に教諭せられし事神明の冥助ありと夫より教への如く又其術を一心お稽古致し居たりける

○吉岡兼房津山の辻切退治に赴く事

并に宮本武藏吉岡兼房と試合相引の事

恁て宮本武藏の攝津有馬にて有馬喜兵衛を打据る大膽おも有馬の湯治場にて諸國入込の所なれを浴客の武士を探りて敵の手掛りを求めけるも是どと云ふ見認めも有らざれば頼て其所を辭して是より中國を志し浮田中納言秀家卿の領國なる作州津山に來りける此時浮田家おは伴兵藏宮田重左衛門鶴殿兎平とて三人の据物切に達人あり何れも無双の手練にして行道人を矢筈に切るお其者切られし事を知らせ三町程も鼻唄なを謠ひながら歩行て石なを蹴り始めて二つよ成て倒れ死すと云ふ斯の如くなれを彼三人の者お面白き事と思ひ夜なく出て人を切しを津山の城下の者共大いに恐れ是と天狗は業なるべしとて日暮てよりは外へ出る者一人もなく因て日没より城下と殊の外寐しく有しとあり扱宮本武藏は此三

人の中ある伴兵藏と養父武左衛門とは武藝の交り深しと豫て聞知りけるにぞ先づ伴方に頼らんものとして尋ね行案内しけるが兵藏と豫て聞及びたる武左衛門が養子武藏の事故大に喜び暫く當所に逗留して旅の勞を休め玉へとて懇切に饗應けるにぞ其詞に隨がひ津山に暫時足を止めて佐々木巖流の有家を求め居たりける爰に當時京都に在りて其身分は町人染物屋を渡世とする人に吉岡兼房と云ひて劍道無双の達人有けるの一時津山の町人に天狗業ひて人の切れて死する事を聞き必定是は辻切の名人が所爲ならんと案し諸人の爲め卒其の惡戯天狗を退治して遣らんとて津山の城下へ來懸りしが果せる哉三人組の連中に出逢ひ順番を以て鵜殿兔平物をも云の老後より抜打に切付る此時兼房の老人はわとや眞二つと思ひの外一足斜に退さながら一尺二寸の短刀にて確手と請止たれば這く仕損ぢたりとて兔平は引外さんと思へども即飯を以て付たる如く少しも働く事能えねと流石の鵜殿も進退谷りてぞ見ぬにけるが兔平の心に徹する所や有けん聲掛て暫時待玉へ我々の太刀先を斯止められしと恐らくと宮本武藏か兼房殿ならんが老体の處でと必定是は吉岡殿あるべし卒名乗玉へと云ければ老人莞爾と笑ひ察一の通り如何おも我は兼房あり然云るゝは鵜殿伴宮田の三名の中は外れまじきが近頃鵜所の辻切甚しく往來の難儀市中の衰微を思ふざる非道の所行と存せざる故彼是以て兼房意見の爲め態々是迄参りたりと云ふ鵜殿は聞て大に驚き兼房殿と存せざる斯る無禮偏に御宥免下さるべし何をの隠さん鵜殿兔平にては扱と鵜殿氏おいの拙者に於ても無禮の段御用捨下さるべし彼所に居らるゝ御兩人は宮田伴なるかと詞を聲られ兩人も立出で面會の挨拶をな一三人等しく向後辻切の事之屹度相止むべき由を誓言し兼房を誘引

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

ひ宮田重左衛門方へ到り種々馳走に及びける然れ共三人は心を合せ間もあらむ兼房を討取らんものをして示し合せけ共勿々近付く事能く數日を過しけるが終に其熟練に感腹し殺害の念を止まりける時に浮田秀家卿之領内巡視として津山城に入來有しにぞ城代長船紀伊守万事取計ひ饗應致し且つ曰く君の御武徳盛んなるに因て當時劍道の達人と呼ばれし者御聞及びも在せられん神明二刀流の元祖宮本武藏は伴兵藏方より又小太刀の達人吉岡兼房と宮田重左衛門方に各此節逗留致し然れば此兩人に試合仰付られは、格別の御一興あらんと申述る秀家卿喜悅て今天下に隠れなき者共此所に在ること予が仕合なれ早々申付上見物せんと申されけるよぞ即時に伴田宮方へ申遣しければ兩人畏り宮本兼房へも通せけるお各承知の旨返答せければ伴兵藏は宮本武藏を宮田重左衛門は吉岡兼房を召連れ太守に見え致しける秀家卿は兩人の体を熟覽せらるゝに宮本は二十六七歳兼房と五十五六歳兩人共如何にも剛氣の英雄たる事一見して判然たり秀家も詞を掛られ付ては試合を望み玄妙の業を見ん事を懇望す此段只管頼むありと懇切に申されければ兩人畏り御請け致し次の間に退さける頼て兩人共支度を調へ立出るに宮本は柿染の帷子柿染の鉢巻を締め兼房は水色の帷子に晒の鉢巻なり秀家中央に着坐致され左右にと長船紀伊守明石掃頭助戸川肥後守花房志广守猪飼甚四郎香地七郎左衛門近藤三左衛門を始め其外の諸士倚羅星の如く並居たり時お兩人は太守の方に向ひ一禮を爲し又互に式禮終りて宮本の例の如く右と二尺三寸左の一尺二寸の刃引の太刀兼房は常々一尺二寸の短刀なれども今日は二尺餘の刃引の太刀あて立向ひ青眼に構むたり宮本は左右の太刀を天地に構む立向ふ稍暫時位を取居たりしが隙を得て

四十六

兼房が青眼の太刀上段へ變化すると見せしが忽ち打込たる有様は電光石火より烈しく吐
嗟と見へし宮本は一足後退て發止と十字に請止めたる其形容宛然鋭伴めて留たる如く少
しも動かさず兼房も打込たる太刀を引事能はず又宮本も同トく一刀を引事ならず打合せし
儘もて兩人汗を流す事瀧の如く並居る満座の人々も勝負如何と手に汗握り静り返つて見物
す扱も兩人は天下無双の達人あれを打合せし儘にて一分一厘の際間もあきさしや合せし太刀
の變化もあき半時ばかり争ひしが忽ちに兼房が眉間より血流れ出て晒の鉢巻朱に染りける
是も因て秀家卿始め並居る面々大いお感之宮本は不測の達人なり只太刀を合せし計りにて
兼房の眉間疵を付しと見へたり最早勝負と分りしとて皆一同に感之ける時に双方有無を
云とぞ組たる太刀を其儘互ひに引離して禮に及びしが兼房は敢て恐るゝ色なく悠然として
扣へま故人々之を怪しみける秀家卿と聲を掛られ勝負と宮本が勝なるべきやと申されけれ
を武藏は答へて只今の立合然あらず則ち勝負互角にて勝とも負とも相分り申さず兼房
は鉢巻白くし故眉間の血汐表に顯れ申し某一の鉢巻は柿色にし故血汐染染て表へ目立ち申
さず是御覽下さるべし斯の如くにしとて鉢巻を解捨て宮本が眉間も精血流れて有けるに
ぞ満座の人々不思議の思をなし稀代なる哉唯太刀合せのみみて斯く精血の出まど如何なる
仔細なるやと尋ぬれば兼房對へて是は互に精神満々たる所よりして自然と精血發しはなり
と云けるにぞ實に名人同士の立合なれば斯る精妙なる事も有けるよと人々益感之ける秀家
卿にぞ其手練熟達と尋常人の遠く及ばぬ所なりとて甚だ感賞せられ側近く招き寄せ盞盃を
賜はり引出物せんとて差料の刀一腰宛與へら其上種々變應申付られけり兼房の曰く宮本

傳勇英藏武本宮

傳勇英藏武本宮

殿は未だ若年なれども聞しに勝る達人なり殊に左の短刀と吉岡無二齋殿の刀法よ能似たり
不思議の事よと云けるにぞ武藏は對へて其許の御手練勿く絶妙にて某是迄諸國を修行致し
いへと足下の如き熟練の者も出合申さず殊に太刀筋の玄妙に於ては亡父の流義に能く似
てい某が實父と中國毛利家の藩中吉岡無二齋ありと申せしかを兼房扱と恩師の御子息にて
いか某し若年の時身持放埒に因て師の勘氣を蒙り其より後悔して何卒生前に一度の勘當の
赦免を願ふものも存せしに圖らずも今日當御前よ於て貴所に對面致す事師弟の縁の盡さ
る所舊師に對面仕つる心地よしなりと云ふ武藏思はず眼中湍みしが太守の前なるに付只不
測の出會をぞ感之ける秀家卿は兩人の手練の程を深く感之れ何卒して兩人共に召抱へ度
段申出されけるに武藏と思召の冥加至極有難くいへ共某し義は加藤清正の家臣あて武術修
行の爲め諸國を廻る儀にいへを御奉公の儀に只管御宥免を願ひ奉つると辞しければ秀家卿
と力無く思とれ主人在る身の上とあれを力及はず然れば兼房は如何あやと有れを某の仕官
の望み之れ無き段申述けるよぞ然ある上はとて兩人へ猶數多の引出物有て暇を賜はりけれ
を兩人は有難由申上げ各退出したりける是より兼房は宮本の寓所伴兵藏の方より到り何く
れと昔の事共物語り無二齋の安否を尋ねけるに武藏は落涙して父が横死の一件付てと其敵
と必き佐々木嚴流なる者ならんに付武藏修行の中其者を尋ね求むる由を語りければ兼房を
大に驚き且つ其孝心を感之て曰く某しも己お御高恩を受けし先生の仇あれを失敬ながら助
太刀仕つり度存せれ共御勤氣の身の上と云ひ且つは其許の御修練にては如何なる強敵とて
を討洩と事有べからを隨分御身を慎みて本意を遂げ玉へ某一京都よ在りて諸事よ氣を着け

五十六

佐々木慶流の手筋を得れば早速に熊本か若くと御出向の先迄を御報知申べしとて堅く契約
て別れける宮本も亦此津山よは夫どと思ふ見込を無ければ是も伴兵藏を始め鶴殿宮田にも
挨拶し備前を當して出立しにける

○宮本武藏白倉源五左衛門の道場よ来る事
并に白倉が奸計入湯危難の事

恚て宮本武藏と津山を立出で直ちに備前へ赴かんとせしが去にても彼佐々木慶流若しや姫
路に立歸り居らん事も知れせとて再び足を播磨路へ向け姫路に來りて人の風聞を聞くに慶
流と先年京都お於て太閤殿下彼の者の心術邪惡あるを知らし召し町奉行より京都追放あり
し義に付御一門たる木下少將殿に於て召抱へ置かるゝ事能はず先達て慶流私かに立歸りし
が直ちに御暇仰付られ其後又行方知れざる由あるに宮本と其時期の齟齬たるを蹉跎して
憾みしかども今は早其詮もな之是唯だ時期の未だ到らざる所ありとし頓て備前の岡山へ來
りけり當所に白倉源五左衛門と云ふ劍道の達人在りて此人未だ新參なれども既に門弟の四
五百人有り甚た繁昌ある故常に高慢めて人を侮り輕しむる由を聞取たるにぞ彼白倉は若し
や慶流ならんも圖り難し一先其道場に到り白倉が實否を探らんとて頓て玄關より武者修
行の者先生の御高名を承はり御指南に預らん爲め参りし趣を申入けるにぞ取次と斯と白倉
へ通なたり源五左衛門と取次の詞を聞死て笑を含み何程の事か有ん我が威を示し呉ん程に
苦しう無い此方へ通すべしとて其身之中央に座し左右ふと免許の門弟福田十左衛門福島金
左衛門村上榮次郎猪子内匠淺田源七貝塚万左衛門高田專助等を始めとし肩臂を怒らし威風

を輝かし待居たり宮本武藏は案内お連れて座に通り白倉に對面なるとに思ふ仇たる慶流にと
非ざりし故心中甚だ望みを失ひけるが都て其容体の高慢なるには些し心中に怒りを起しけ
り時に白倉の指圖に因て福田十左衛門立出試合お及びるが何の手も無く打負け次と猪子
内匠なるが是も手も無く打据へられ其次と高田專助村上榮次淺田源七等交るゝ立向ふに
何れも打負て遠々の躰に會たりける源五左衛門は最前より宮本の太刀筋を見て居たりしが
此奴勿々只者に非ずと心中お驚きたれ共此場に及んで如何共詮方なく武藏に向ひ御手並驚
き入る所あり先々某し御相手致さんと身拵へて三尺二寸の木劍を以て立向ひ青眼に付け
るに武藏は例の如く両刀を天地に構わたり斯て暫く位を取り居たりしが白倉忽地上段に變
じて打込を例の十字に確と受止めたり白倉と是と仕損なたりとて木劍を引んとすれば付入
る様子あるゆへ押破らんととれ共磐石の如くにて少しも動かざれを今と白倉も進退谷より
詮方なさに一生懸命の力に任せて十字を破らんと押付るを武藏は得たりと左劍に受流し右
劍を外すと見る中白倉が木劍を握みて打落すに白倉も去る者二間をかり飛退死けるを武
藏と續いて飛込咄嗟と思ふ其中に両刀を閃めし白倉が両足を拂ひ筋斗打せて仰向けに倒し
飛退つて禮をなす白倉の面目を失ひ漸々よして起上りしが元より奸曲者の事なれば無念を
隠して云ける様御高名は承これども斯斗りの御手練とは存せざ扱ふ驚き入たる御手の中勿
々某し如き者の及ぶべき所よあらず且又両刀の名人とて芳名高き其許の我道場へ御來臨
れ有る事此上もなき幸なり先々此方へ御通り下さるべしとて武藏の手を取て座敷へ請じ種
々饗應なしけるが時に白倉改めて申けると某し今日目前御手練を拜し遠く及むざるよとを

悟りゆ因て今日より我が師と仰ぎ師弟の縁を結むれ御指南下さらば有難き仕合せありとて思ひ入たる様子にて頼みける武藏と元より篤實の者あれを其頼みに應じて承引あしたりけり斯て武藏と白倉源五左衛門が心に奸謀の巧み有とは毫知らず一方ならぬ饗應を受け日源五左衛門に兩刀の術進退懸引を傳授致しける然れを隙行駒の脚速く早晚其年も暮あ及び極月にぞ成にける宮本が此の如く逗留して劍道を授くる事は是主人清正公が劣る者は取立て得させよと武者修行出立の際申付られし生命を守るの律義なりけり茲に於て源五左衛門は心中お情し思ひけるは我も此程と二刀の術意大概と會得致したれを今は武藏を殺すとを差支へなし宜に謀計もがなと種々に工夫を凝しけるが屹度案付付たる事あれば同氣求むる腹心の門弟七八人を談合ひ新たに風呂場を普請し新調の居風呂を設け湯桶を仕掛け外より大釜にて湯を沸し注ぎ入るゝの拵へなり謀計已に準備たりければ明日は宮本を亡ふべしとて同志の門弟を招き其手筈を定め仕損乏無き様申含めける扱も宮本武藏は早其年も暮なんとするにぞ一先づ當地を發足せんと思へば今日や斷り云て立出んか翌日や暇を告げて辞せんのと一人心に思ひ居ける所へ主人源五左衛門罷出で今日と年忘れ致さんとて門弟中の所望ふ付聊か酒肴の設け出来いへを先生おも御出席下さるべし是門弟共の懇望よいとて頓て武藏を座敷に請じ種々饗應に手を尽し門弟共と交るゝ盃を乞て止ざるあ宮本は其手厚き請待に心喜悦び時刻を移して數盃を傾けしかば今武藏も大に銘酩致しける斯と見て白倉入時分は好と思ひければ宮本に對ひ先生にも豫て御存念の箱風呂出来いに付今日は風呂開き仕つりい間先生にぞ先づ御入湯有りて今宵の緩く御呑直しを願ひ度と云ければ武藏は

宮本武藏英勇傳



否、其しは大に熱酔致したれを最早此上飲む事は能ふまじ故に暫時相休み酒氣を散きて後入湯致すべしと辭をけるを傍にお在し門弟の云く箱風呂にて天井なき故逆上の憂は無し却て酒氣散きも早くい何としのれ先生へ御馳走の風呂あれば平に御入湯有べしとて様々に勸めけるにぞ武藏も今は辭まん様なく然らば仰に隨がひ御免を蒙り御先へ入湯致すべしと即時に湯殿へ赴きけるに下男と覺しき者火を焚死居たりしが夫と見るより御湯口は此方なりと案内すれば神ならぬ身の宮本は斯る奸計の有とは知らざ何心なく這入けるお直ちお落し戸を下し錠を差鎖たり白倉源五左衛門と豫て計りし事あれば門弟と共に大に悦び仕済したりと風呂の篋口より玉ざる如き熱湯を引掛け、繼込し故中に宮本堪へ兼ねて大音お湯が大いに熱く成たる程に水を下されよと頻りに呼よりけりども更も答へなく益々熱湯を繼込ければ今は武藏も堪難く因て飛出さんものと風呂の戸を引共明かお押せ共動かす大聲上て呼へども有無の答へもなく外よりは爰を専途と熱湯を絶間なく樋の中へ汲込けるゆへ風呂と彌々玉ざりて武藏の惣身眞赤に爛れ出し片時も耐難き故此時に至つて始めて計畧に陥入たる事を知りければ汝白倉奴卑怯未練の振舞のな何程の事や有んと一身の勢を出し天地諸神お誓ひて曳やくと一押二押押たれをさしも丈夫お固めたる落し戸を忽ちに押伏して外へ跳り出たり是を見るより白倉聲掛け夫逆すな討取と下知の下より數多の門弟八方より馳懸るを武藏は怒りて宛然阿修羅王の荒たる如く手當り次第お引摺み前後左右へ破羅離々々々と投出せば門弟の面々大いお周章廻る其間に武藏の風呂の落し戸の貫木を引放し是幸ひと打振て眞一文字に飛蒐り無二無三に打立忽ち二三人を打仆す此時白倉お叶はじとや思

宮本武藏英勇傳

ひけん逃んとするを宮本と飛鳥の如く飛來り汝奸賊白倉源五左衛門思知れと彼貫木にて打て懸るを白倉を心得たりと引外し一刀を抜て打合せ二打三打戦ひしかども争で武藏に叶ふべき忽ち頭上を打碎かれ血煙り立て死したりけり是を見るより門人輩四方八方へ逃行ければ武藏の吻息を突き熱湯お逆上たる上大力を震ひ働さしお咽の渴くお庭前の手水鉢なる水を香居る所へ白倉の妻長刀を打振て良人の敵逃さおと切て懸るを早速の武藏飛退り艶しくも敵呼より先々此世の暇を取せんと貫木振て飛入ると見へしお哀れむべし微塵も成て死でけり是より先き白倉が召使ひの下人共逃出しながら人殺しと叫び立てければ其騒動大方ならお上を下へと混雜す是より因て領主浮田家より掛りの役人捕手の者を召連て狼籍者を鎮めんと早馬にて馳來り白倉が邸を混々と取巻たり宮本武藏と此体を見て生捕れては面倒なり一先此場を立去んと手早く支度して幸い床の間に已れの大小有ければ大いに悦び是を帶し早々裏道より高敷越して立退たり領主の役人白倉が宅に込入りて見るに狼籍者は在らずして源五左衛門夫婦並に門弟輩の死骸有れを夫是吟味あるより即死五人手負の者八人其外と逃失たり是より因て其次第を白倉の家來を糺しけるに家來輩隠す辭能はずして明白に陳述し茶れば白倉が奸悪を憎み不屈の致し方ありとて討れし者と犬死となり白倉が宅と取拂ひにぞ成にける

○宮本山賊を懲し高田が妻の危難を救ふ事
 并高田重兵衛宮本を饗應の事
 仇お報するに恩を以てすると至正の人にて良し左無くとも恩を受けて仇お報するの不道を爲

さんや白倉源五左衛門が禽獸の志より淺猿けれ借も宮本武藏は虎口の危難を逃れ足お任せ
 て備中の方へと赴き何處とも知らぬ深山に踏入しが此所之人家とても無之山深くして斷雲
 後を絶ち風寒ふして旅人の夢を破り音する者は谷川の流れ松吹風は飄颻たるをかりめて心
 淋しき處なれども元より勇氣人に勝れし武藏なれば些も怖るゝ事なく往程に其日も暮近く
 成たぞけり然ども宿借るべ死家も無く殊ふ今日の危難にて大いに勞れけるゆへ斗在岩根あ
 腰打掛て休み居しが折節雪の霏々として降り來れを便惡しと思ひつゝ四方を見るも遙か彼
 方に古びたる辻堂あり是幸ひなりと此所に到りて見るに家根の破れて月を入れ椽と初ちて
 枯尾花を殘れり然も此堂内にて夜を明し曉なむ又仕様も有べしと思ひ頓て堂内よ立入傍を
 見て遣るに既日と暮て眞の闇左の状況分らねど手を伸して探り見るに戸帳の布の手に當
 りしかば是を其儘身よ纏ひ若や供物の有らざるやと又も四邊も探をど一物なし然ば是非か
 し卒で熟睡んと其儘に腎を枕し寐んとそれども雪と益々強く降り來り山風甚く暴起ちて戸
 の間より吹込む故身体凍れて堪難く眠りも遣らで居る所お表の方お人聲して此方を當て來
 る者あり何者ならんと様子を探ふ所二人と見へて堂前に來り一人の聲として思ひ掛なく大
 雪よて身軀甚だ凍へたり焚火を煮して煖らんと云ふ又一一人の答ふる様我等斯有んと思ひし
 故薪を用意したり汝火を打てよとて薪を持て來るにぞ頓て薪に火を移しあたり居る様子な
 れば武藏と堂内おて息を殺して窺ひ居たりしが焚火の火影も明るき故戸の透間より表を見
 るお兩人共大男にて長やかなる山刀を帶し頭上に藁頭巾を冠り其傍らに一人の女を縛り口
 に猿轡を含ませて引据たり武藏心中に思ひけるは是必老山賊夜盜の類ひあるべし卒で此奴

宮本武藏英勇傳

們を懲して彼女が難義を救ひ遣んとて戸を押開き欠伸ををし兩人が火にあたり居る其間へ
 悠々として立出つゝ我をも焚火へ焙せよと云ふ而賊は大に驚き目を定めて之を見るお此寒
 天に浴衣一枚と着し大小を帶したる者もへ賊共一向合點往かずして曰く汝此所へ邪魔なさ
 る命が無いぞ早く立去れと云ふ武藏大笑ひ汝們は非義非道を働く盜賊共よな我は汝が如
 死者を懲さんと思ふなりと云ふ賊們呵と打笑ひ愚鈍なり汝一人の裸身を以て國の盜賊
 を懲さんとは言可笑し長居せば爲惡かい早し此所を立去るべし武藏は聞て我と盜賊に出會
 て衣類を剝れたり因て汝が衣類を脱で我に與へ何與へぬと申か好く與へずんば我汝を剝
 ぐべしと云へを兩賊大に怒り物な云せとて一齋拔連て切付るを心得たりと引外し手元へ
 入よと見へしが一人の利腕捻上げ肩よ擔いで投付る隙もあらせず一人が又も苛つて切込を
 衝と搔潜り手練の當身に肋を突を云と云て倒れたり武藏は之を見向もやらず泰然として火
 に焙り居たりしに暫くして兩賊も起上を武藏は之を打見遣て汝早く衣類を渡せ遅刻致せ
 ば息の根止んと云へを兩賊は戰へあがら衣類を解き赤裸をばら卒とて之を交附すにぞ武藏
 は取て着用し帯を取て確と締め盜よ對ひ其所に在る箱と何なりや何と辨當なるどか早し是
 へ持參せよ其傍らの徳利は必ず酒なるべし夫も此方へ渡すべしとて飢たる身おれを頓てし
 たゝかに飲食を濟ませ又焚火に焙りながら汝等此女は如何せしと具に申せと問ふ彼賊答へ
 て今は何をか包みやべし北國越前の山中に雷權九郎と申す盜賊の張本ありて手下の者八百
 餘人及び某し們も右權九郎が組下なるが五人十八一組となり國を横行して富家と見れ
 るを押入て財寶を奪ひ又は美目よき女おれを勾引して山塞へ連行品に寄り遊女等よ賣代なす

宮本武藏英勇傳

四十七

事なり因て我々此國ふ来り此女を見當りたれば好き獲物と存之奪ひ来りし事なりと委細に語りけるよど頼て兩賊に命之女の縛め猿轡を外させ又女お對ひ御身は斯る危難に逢れしは氣の毒あり何れ遠方の人にも有べのら宿には兩親を有て無案に居るべけれを今より我御身を親里へ送り届け遣さん心安と思はれと而て宿所と何方ぞと問けるに女は是を聞て初て蘇生たる心地して大に悦び斯る御方に出會危急の難を逃れし事我が身の仕合なりと涙を流し禮を述べ儲私に此松山の城下在る高田村の郷士高田重兵衛と申者の妻にしが今日は佛の忌日にて下男下女召懸れ佛參の歸り道圖らむ此危難に逢ひし御推量下さるべしとて又潜ると泣居たり宮本之を聞きり兩賊も向ひ汝們恚る非道を働之人外我天に代りて汝等を誅すべきが我が言に隨ひなむ一命は助け遣さんが如何ぞやと云ふ兩賊は頭を垂れ英雄の御詞何ぞ違背仕つらん一命と御助け下さるべしと云へを然らば一人と此女を脊負ひ一人と木の枝を束ねて松明とし先に立て案内せよ異論も及ばず打殺すべし早くくと急がし立るよ兩賊と詮方なくく其詞の通り行ひて元來し道へ急ぎけり爰に又高田重兵衛と今日女房が佛參の歸り遅れ故案に居たるが下男一人息を喘りに馳返り途中にて山賊に出會ひ奥様を奪れしと有し次第を告げるよど重兵衛大に驚き其の以ての外の大變あり未だ遠くへ行まど手分して追手を懸よ早々用意せよとて近隣の百姓共を大勢呼集め主人重兵衛と夫々に差圖して八方に追手を走らせ尋ねければも行方更に知れざりける是も因て重兵衛は云ふに及ばず百姓共も今と詮方なく殊に日を暮ければ明日は手分を定めて尋ねべしとて夜半過る頃までも評議區々なる所へ表の長屋門を叩く者有あぞ下男と立出て之を見るに赤裸の男二人一

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

八の松明を持ち一人は内儀を脊負ひ其後ろに乱髪らんぱつの男附添居るにぞ下男の驚き願掛けをば内儀は聲掛け必ず怪しむべからせ早く門を開くべしと云ふにぞ下男馳て此由を主人に告ぐ重兵衛は大に悦び是非は兎もあれ女房の歸りしこそ安堵なれ早々門を開き内へ通せと命之けるよど急ぎ潜り門を開きたり武藏は兩賊に向ひ汝等申付通り働さし故今度は助け遣りすべしと云ふを聞より兩賊は大に悦び女房を其所へ下そや否後をも見ずして逃往けり宮本は彼内儀を連れて入りければ妻と重兵衛に向ひ詞短かよ物語りしるを重兵衛の宮本お向ひ手を突き救助の恩を謝し卒此方へ御出下されと宮本が手を取て座敷へ請じ夫婦諸共手を合せてぞ拜みける恚て女房は本夫重兵衛に向ひ我身山賊に出會しと観音峠の次第又宮本が武勇よとて賊を懲せし緯どもを語りしかを聞度毎お重兵衛大に驚き且其仁勇を感ト幾度と無く禮を述るうち勝手より酒肴を持出で須臾酒宴をありけるが宮本は亦夫婦に向ひ某し彼辻堂に在し時浴衣一枚を着せしは妻室を必定見玉ひしならん此姿に及びし緯と斯々と岡山よ於て白倉が一伍一什を述けるにぞ重兵衛大に驚き扱は此頃二刀の名人とて世に鳴り渡りたる宮本氏よて御座せしか何は兎もあれ拙宅へ此の如き英雄の御來臨有こそ家の面目誠も以て有難き仕合なり殊に備前表の御危難と云ひ御働さ凡人業とて存せられと賞讃して止されを聞入る女房も驚顛し扱は左様の大難お逢玉ひしか而て御身体にて何事の御變りも無きや如何おやと信切に尋ねければ宮本重ねて曰く拙者右の通り箱風呂おて半を焚殺さきんとせし故見玉へ此の通り身体數ヶ所爛をて身心健全ならず願ひくは療養致し度存するが甚だ御迷惑あらんよ暫時逗留を免され度と頼むにぞ重兵衛と何が扱最易き事なり御心置さく

五十七

六十七

緩々養生仕玉へとて此大難を過れしを悦び祝しけるが其夜は己も明たれを順て近村より功者のの醫師を迎へて厚く宮本の療治を致させけるふ日を重ねて追々全快あ及びける宮本と大お悦び斯ては最早大丈夫なり今年も己に一兩日と押詰れば當家も嘸ど繁忙あらん卒發足すべしとて高田夫婦へ此趣を語りければ重兵衛之是を聞き是は以ての外の御事なり醫療早速に行届たりとも未だ全快と申にもあらず猶又我方へ斟酌ありての御事何ぞ左様の御心遣あ及びべき緩々御療治あるべし是第一此後の爲なりと云へば妻女も亦其心遣ひ無用の由を述て只管お留めざる故宮本も差て急がぬ旅されば夫婦の好意を厚く謝し然らるを仰ふ隨がひ今日御世話に預るべきとて高田の方にて春を迎へける一日熟々と思ひ運すに我國を出去より年已に重ると雖も未だ本意を達するまど能はず第一空しく日を送るまど意恨るれ早々此處を發足して敵巖流が在家を尋ねんそのと主人高田重兵衛お打向ひ扱も不思議の縁に因みて舊冬より段々御心切なる御世話に預る而已ならず永之逗留せし御禮勿々言葉お盡し難し先達ても内意を物語りし如く某と敵を尋ね且と劍道修行の身なれを名残と尽せしへども明日と此所元を發足致すべしと申けるに重兵衛も今更お名残を惜み其御禮と某しこそ申べき詞なれ舊冬愚妻が危難を御救ひ下されし大恩と山海も勝りしなり然るまど逢ふ事あれば必らず別るゝは世の習ひもへ如何共詮方なし因て今宵は寛々御名残を惜み申さんどて時移る迄酒宴を催しけるに高田が妻も甲斐々々しく馳走つゝ實お昨日今日と思ひしが妾が危難を救ひ玉とりしも最早二年と指を折る事おなり侍りぬ然れ共今日しも御逗留あらまほしとぞ申ける折のら亭主重兵衛と立派ある衣服に金子一包取出し宮本が前お差置て近來失禮の

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

至りあれ共女房の受し大恩の万分一をも報せん爲お進上致す所あり又此一包は路用の爲め餞別の印迄お差上たえ御心置なく御受納下さるべしと有ければ宮本と面を正し這は思ひを寄らぬ御厚情拙者より御謝禮も申べたの處却て貴殿より御惠みお預り痛み入併しおのら危難に逢し此身故衣服は拜借致さんが金子の儀と御免お預りたしと辞退しければとも重兵衛夫婦と聞入れず詞を盡して種々に進めて止されを宮本も今は辭するに詞あく然らば仰に隨がひ受納仕つらんとて押戴さ懐中致しける恁て其夜も全く明けけるが旅より旅を歩行く身あれば用意も手軽く高田が宅を發足すれば重兵衛夫婦も村外れ迄見送りて互に再會を誓ひ名残を惜みて別れけり

○宮本武藏卜翁の棲巢お到る事
并に塚原卜傳と試合の事

斯て宮本武藏は備中の國を出で備後因幡伯耆を巡行深山幽谷まで分け入り只管巖流の行衛を尋ね傍ら劍道の師と聞時は立寄りて試合を爲すよ手お立の者一人を無く猶も警仇の在家を聞探りけるに未だ手懸りとも無く空く月日を送りけるが日を重ねて北陸道なる越前に來りまかば是より信濃の國へ赴て巖流を尋ねんと足を早めて行處お不圖途を踏過り思はず深山お迷ひ入りて今は方向も定めに分らず漸々樵夫の通ふ徑おや有らん細く付たる艸分徑を辿り行くに只巖石嶮々として松柏蒼鬱として天日を遮ふ故武藏も困じ果けるが只足お任せて急ぎ行か一つの山と越したれども山又山と重疊して更に通ふべき路も無ければ陸方おくを茫然と佇立居たる所お向ふの方より一人の童子身に草刺の籠を背負ひ牛に乗て横笛

七十七

を吹澄し悠然として行過けるふ宮本と是を見るよりも大いに悦び童子暫時待玉へ是より八里へ出る道あらを敵へられと呼掛れば童子は忽ち笛の音を止めて此方を振向き御身は何處より來られしや此處より八里へは甚だ遠しと云ふ武藏は傍近く進み某山中長途を踏迷ひ身神甚だ勞れ歩行も最難澁あり預くは御身の家へ連れ行き休足させて給へるべし童子曰く其之餘義なき頼みされども我等主人あり常に世の人と交る事を思まれば痛しけれ共伴ひ難しと云武藏重ねて曰く御身の詞は道理ながら我斯く勞れたれを其庵迄伴ひて我申す事を御主人へ達して給へ尙ほ免されぬを其時直に門口より立去るべしとて達て頼めを童子も然らばとて宮本を誘ひ行事八丁許り絶景の山腹に柴の戸を構へ其奥に幽なる一室あり誠お風俗を離れし住居仙境も斯やと思ふをかりなり童子と入て所以を告げん暫時有て出來り主翁の免せる趣を述べて伴ひ奥へ入にける宮本と瞳を定めて四邊を見るに白髮童顔仙風遺骨なる一老翁爐邊に在り武藏謹んで山路行履みし辛苦を語り依之休足を願ひしに御承引下され有難き事身お餘りいと云ふ老翁此方に對ひ客人の所望辭退し難く然ながら見らるる通り次第よて一物も無き柴の庵あれを饗應べき物も無し只御身の勞れを休めらるる而已ありと云ふ宮本と厚く禮を述べ食事の某し用意仕つれば何卒爐中の鍋を御貸し下さるべしとて腰より一つの袋を取り出し米を出して谷水にて洗ひ鍋に移して爐お釣し火を強め粥の出來るを待居たり是武者修行の米を持つ規則なりける暫時して粥の熱せしふぞ初盛の一椀を老翁に進めけるよ翁之舌打鳴し久々にて米の粥を食して甚だ美味を覺へたりとて又一椀を替へて食せり武藏は頓て童子にも與めれば童子と辭して之を受けず宮本強て進むれば老翁許

宮本武藏英勇傳

容一の詞を出す此に於て童子と一體を述べて此を食する其形容勿々尋常の童子の及ぶ所ありらず斯て武藏と食事終りて漸々お腹中を養ひしかを爰よ於て小廬の有様を熟視するに主翁は名譽の劍術者が隠遁せし者の如く且其結構と凡俗を離れし風采あれば唯意中に感伏し何卒して武道の奥義を教諭お預らんと思へば老翁に對ひて某しは宮本武藏と申て諸國劍道を修行致す者にてしが今御老人の御住居に之木劍兵書等御備へ有るを見請けり察するに英雄の世を厭ひ給ひ御心を澄せらるるならんと存じ奉つる仰ぎ願はくは一太刀の御教授を許し玉は生々世々の御厚恩なりと思入てぞ頼みける老翁曰く我も世不在し時の劍道お心を盡せしが老年及びて勝負立合など、て五月蠅ければ見らるる、通り山林に住居して世の人と對面するを厭ふかり中々立合などと思ひも寄らずと取合されと宮本請て止ざるにぞ果と老人の氣短く童子を呼びて宮本の爲に道の案内を命じ立去らんとを促すにぞ武藏は頻りお奥床しく此儘立出んまど残念なりと思ひけるに一夜の宿りを請ひて爐邊お對ひ居たりける恁て其日も暮果てざるにぞ互に武道を物語るに翁の論は極めて金玉の高論なれを武藏は開度毎お驚歎しつゝ時移る迄武術の論及びしが老翁は退屈なる様子にて武藏お對ひ客人と好き氣根かち我老衰して根氣薄ければ退きて眠るなを免されしへとて身を起し納戸の内に入にける跡は童子と對合て物語などしけるが勿々尋常の童子おあらざれを是又高論多かりし故宮本心中大に驚き益々其凡からざるを信する物から童子に對ひ今は早老人と御臥みありし程に最早憚る所なし依て御身と試合致し武術の程を極めたしと望めを童子と勿々肯せず師匠と御臥みありしとて御心迄は眠り給へる今御身と試合する時と明日と必也叱

宮本武藏英勇傳

りを請ん試合は無用なりとて堅く辭と宮本は猶強て望み若し老人の怒り玉は、某之諾言申
 べしとて彌々乞て止ざれを今はとて童子も諾ひ木劍を携へ戶外に出づ折しも空合かき曇り
 眞の闇にて文目を分たず武藏は入て爐中の薪を持來り燒火の明を借らんと云ふ童子と嗤て
 御身は劍術未熟なりと云ふ武藏は心中少しく怒り其仔細を問ふに童子と對へて足下と心術
 無死故闇夜の試合に能ざるやと云これ流石の宮本大に恥入り實に道理と忽ち悟り然ばとを
 かり焚火を用ひて木劍を以て立對ふ宮本と天地の構は童子は青眼お構へたり比しも霜月の
 未なれば一天雪を催ふし迦風初響きて吹下すを兩人少しも氣を留めず宮本一足進みて稻
 妻の如く打下とを童子と得たりと半身を開きて請止るを熾みのけて武藏が一刀足元へ打込
 來れを童子は飛上りて開きたる其迅速なる事陽炎石火に異ならむ武藏は益精神勵まし心を
 碎きて切結び一上一下虚々實々何れも間無く勝負も更に見へざりし武藏が後に飛退を童
 子は得たりと着入る彼の時速く此時遅く武藏の右劍に請けながら左劍と忽ち童子は肩へ
 飄然と一本打込みける忽ち庵中に聲ありて見事なり客人思ふに増したる太刀筋のな先庵へ
 入て休まれよと云ふは則ち老人あるにぞ兩人と驚きながら入て暫時休らふ中よ夜と白々と
 明にけり是より兩人と朝餉の設けして頓て粥も熱したれを先づ老翁は進め兩人も亦食事を
 終へ老翁が教授を思入て乞ければ翁と點頭今御身の劍道お感ざる所有が故も所望に任せ一
 試合を致すべし然しおながら足下兩刀を遣はるゝと如何ある譯もやと問ふ宮本は實父養父の
 業を用ゆる轉末を語る老翁さらむ試合に掛るべしとて童子に命し庭前の雪を掻除さすを宮
 本亦手傳ひて頓て其場所訓ひければ宮本二振の劍を以て待受たり老翁は靜かに鍋蓋を持ち

宮本武藏英勇傳

二重に曲ひ老の腰木履を履て踰々跟々庭の面お立出たり武藏と此体を見て老師得物は如
 何にと問ふ老人曰く是奇り是なりと云つゝ海老腰伸すよとみへしが一身の鍋蓋に隠れし故
 宮本心中驚き感じける何卒して勝を取んと變化の隙を窺ひ居たるに暫時有て老翁とヤツ
 ト一聲叫びおのら三足は進みけるに其聲武藏が心魂お響き渡り恰然鉄砲を以て打るゝ如
 く我知らず三間は退去しが斯ては叶はトと心を勵まし大喝一聲叫ぶと等しく左りの劍を
 打落るを老翁閃然と身を翻せり程をあらせ右の木劍稻妻の如く肩尖を目掛けて打來れを翁
 の鍋蓋おて請止ると見へしが返して丁と打たせける武藏と打れて腕痺れ思はず木劍を取落
 しければ最早我が身体も惜まを左劍を以て頻りに打込しかども唯陽炎の如くよして翁の形
 は眼に遮れども少しも取止る事能はず然れども武藏は苛つて打込むを翁と蓋めて請止め忽
 ち返して其太刀を大地へ確りと押伏たり宮本と力を極めて鍋蓋を跳んくゝと身を蹂け共大
 石を以て壓へし如く少しも動かされを流石の武藏も呆れ果茫然として居たる時老翁は鍋蓋
 を引て悠々と立上る油斷を武藏と見すまじ落たる木劍取り早く兩刀を電光石火の如くお
 打込を老翁は閃然と身を翻し一聲叫ぶと等しく鍋蓋を兩手に持て曳やと劔ける武藏と忽
 ち後へ動と仆れしが其儘氣絶なしたりけり暫時して童子も命を介抱させしが武藏と正氣よ
 成しを喜び爐邊に來り恭々しく手を突き不禮の段を謝す老翁微笑否々客人の手練平凡の者
 の及ぶ所にあらず我若年諸國を遍歴の折柄一人の劍者と立合互角にて物別となりし其劍者
 やと問ふ宮本答て某は加藤主計頭の家來あるが實父と越州廣島の城主毛利輝元朝臣の藩中

吉岡無二齋と申者ありと語るを聞て老翁と隣と手を拍ち實ふく其吉岡殿なりし當時劍道の名譽天下に轟死しが定めて雪を戴く年にもならしならん健全にて居玉ふや今は何を包むべき我と塚原卜傳とて無二齋殿とて交りも淺からざりしと云ふ武藏は聞より平伏し扱の老先生こそ塚原氏にていどや天下に轟きし御名譽は豫て承へりしよ不思議にも今日御教授を請たる事某が大幸此上無しとて大に喜び是より無二齋が横死の轉末其仇敵佐々木巖流とて一流を引めし者なるが自分は劍道修行に専寄て其所在を求むるふ不運にして未だ出會せず無念の月日を送る由を語れば卜傳も信友の横死を聞き懷舊の哀れを催しけるが乃ち曰く仇敵佐々木と云者も勿々の劍道者と在からず容易討取べき事に非ず万一返り討ともなる時無念の上の恥辱あり仍て我に一つの妙術あり信友の無二齋殿への寸志の追善なれば足下此一術を相傳へし然る時如何なる剛敵たりとも恐るゝに足らず則ち號けて合氣の術と云ふ今より此庵に逗留して篤と修術あるべしとて宮本を留めて術を授けよるが流石名譽の武藏なれば僅か半年ばかりにして玄妙なる合氣の術を覺り得たり是は敵に向ふて只其氣合ばかりあても敵を仆その妙あれば扱こそ合氣の術と云ふあり一日卜傳は宮本を呼び我等が技も残る所なく傳授致せし故今は此所止りてを益なき事なり最早發足致さるゝが實父への孝道なりと勸むるにぞ武藏は深く師恩を謝し高恩報する期もあしとて感涙に咽び居けるが漸々あして立上り御縁もあらむ又々尊顔を拜し奉つらんとて互ふ師弟の離別を惜み立出つゝ豫て開置し山路を辿りて下り行きけり

○宮本有馬喜兵衛と兄弟の約を結ぶ事

扱も宮本武藏と東海道を登り行き心中片時の暇もあらず仇敵の行方を尋ね道中種々千辛万苦を経て五畿内より南海道を尋ね廻りしかども一向在所の知れされを堺の津に出で便船を求めて四國路へ渡りけるが日を経て讃岐丸龜に着きたれを先づ金毘羅大權現に參詣し夫より南條郡瀧の宮に詣り武運長久を祈り居たる後遂へ武士一人來りて同玄く禮拜なし神力加護の冥助を垂て劍道者宮本武藏に再會なさせしめ玉へと聲を振立て祈りけるを武藏は聞て大に驚き扱と有馬喜兵衛先年試合負しを無念に思ひ我を討んと付狙ふと見へたり然れども大事を抱へし此身なむ未だ渠には討まがたし卒や宥めて期を延さん否々後れしと評せらるゝも心外なり喜兵衛とて恐るゝ足らざらば勝負を決せんと鳥居の外に佇立て待居たり今や喜兵衛の祈念終りて歸る處に武藏は聲掛け足下は有馬喜兵衛殿ならずや斯申すと宮本武藏なり先程神前に於て祈念の趣に因て足下の心中を知るを得たり我を敵と付狙ふ志操神妙なれを斯く尋常に名乗り申すありと聞て喜兵衛と立止り是は珍らしや宮本氏先年有馬にて試合に負し我更々恨みと存じ申さず然れ共養父喜平次への孝義お御身を討て手向んと思へ共如何にせん我が藝術未熟にして敵對叶はねば夫より後ち年來修行して今月今日此處まで出會せし我が一念の通じたるか先々勝負を決せんと詰寄れを宮本も身繕ひして我も大事を抱へし身かれ共足下が孝義に感ずれば勝負すべし先來られよと両刀抜き天地に構ふ喜兵衛も一刀抜放し上段に構へて向ひしが武藏と合氣の術を行ふにぞ打下すべし隙間なし斯くて果と宮本は陰陽の構へを左右に分る隙を見すまし年來の熟練此所なりと喜兵

并に關口彌左衛門に出會の事

衛と一聲叫んで切込むを心得たりと宮本は發止と十字に請止しが如何しけん左劍は中より勿きと折るれを早速の武藏は身を翻す機會に喜兵衛が一刀と土中へ颯へ切込たり吐嗟喜兵衛と眞二つと思ひしは然は無くして宮本は閃然と飛退き是と有馬氏如何致されしやと聲掛ながら刀を引てぞ立居たり此時喜兵衛の聲を掛られしまゝ刀を捨て嗟嘆なすにぞ武藏と心は怪みて有馬氏我を敵と狙ひ乍ら刀を捨られしは何故ぞと問はれて喜兵衛は容貌を改め今迄足下を敵と狙ひ討取んと思ひしは今足下が討べかりし我を助け玉ひし慈悲心に切先鈍り最早仇も恨みも解果て御身を討べき刀なし先年試合の砌請止められし十字は構を何卒して打破んそのと數年の間山中に引籠り木の股を割り修練せしに一日斯様々々の事より琵琶道人より心術を受し一伍一什を物語り然る此熟練にて足下の左劍を打折しは我身の上の本望敵を討しも同前なり又養父喜平次と世の嘲いを顧みず大酒を好み其上高慢おして人を侮る癖ありし故我を種々諛言すれども曾て聞れず却て後よは我を疎み勘當を致されたり然れども某しと元來攝州有馬の山中なる山賊の子よて木樵の業を以て世を送りしが十一歳の時父母に別れ叔父なる小助と云へる者よ養これし中樹木の上にて茂し枝を切落す馴れし業にて其疾きこと目も留らぬを喜平次來掛り此体を見て身輕と早業を感じ所存の程を尋ねられしはば我身と望む所は劍道なりと答へしが其儘召連れ師匠と共に諸國を遍歴し劍術悉く教授せられ終には父子の縁を結びたる事にて一旦父となり子となるは前世の縁の深きを感じ敵を討て孝養お備へんと思ひし心の張弓も足下が慈悲と情に折れて今と神に誓ひて恨みおしと云ふ武藏と殆ど感じ入り義を見て勇ひは勇士の習ひ斯迄思込たる事なれば討るゝ

とても恨み無え然れ共某しも亦不具戴天の望みあり時至らぬや未だ出會ず大事を懐ける此身なれを無事に納る事と悦びなれ扱又御身の語られし琵琶道人と我が爲よと乃ち叔父香勝寺の住職ありとて喜平次を討ちたる時より以來の話しを一伍一什物語るにぞ喜兵衛と益奇遇を感じ道人と云ひ貴所と云ひ恩と情は狭まる某し推量われよと云ふを聞き宮本と打點頭斯迄絡まる因縁の是を不思議の一つなり仇を恨みも解しとならば今より足下と兄弟の義を結び行末長く義心を尽さんとて打連れ行死酒店に入りて盃を酌交し宮本と勝れたれを喜兵衛は推て兄と定め有馬は弟と成けるにぞ喜兵衛は乞ふて武藏が折たる左劍を乞ひ之を養父の墓前ふ手向んとて其身の一刀を宮本に交付て再會の約しつゝ右と左を別れけり是より武藏は中國を渡り周防の國なる岩國山に來懸りしが後邊より物を言はせ刀の鎧を確りと取り引戻さんと爲す者あれを這と狼藉あり目も物みせて呉んと思ひしが我は大望の有る身なりと然あらぬ体おて其手を拂ひ行過んと爲しければ彼の者は暫時待せよ若者と聲懸れを武藏と振替り何者なるか理不尽に無言の所業奇怪なり又呼止しは何用かりやと云へむ彼者此も願の勇ましき哉雄士怒り玉ふ事勿れ只今足下と摺違ふたる身掃へ一分の際も見へざるを足下の姓名床一と思ひ今の不禮を働さしなり斯申すと柔術を以て諸國修行を致す關口彌左衛門なりと名乗ければ武藏も面を和扱々足下と關口氏にて在するや御芳名は豫て承まこりしか共未だ一回も面會を得ざりし幸ひよして今日圖らば對面せしこそ悦びなれ某しと劍道修行致と宮本武藏と申者ありと聞より關口は横手を拍ち扱は當時天下お隠れなき神明二刀の元祖宮本氏にて在するも某しも一回貴殿お御意得度く思ひしに其心の空

しからせ今圖らずも面會を得しよとの悦しよ然ば武邊者は武邊者こそ友なれ今宵と一宿
 同伴致し御高論を承まはらんとして關口は跡へ立戻り宮本と同道して麓の家を頼みて一宿し
 互に諸國修行の咄より武道の論も及びしが何れも高論卓絶のみあり關口と宮本と對ひ世
 むは種々の劍者をも有ものかな此先き豊前國小倉に到りしが同所に佐々木官太夫と云者と試
 合せしが彼業と勿々熟練の者あれども其行ひは巧言令色にまて人を侮り己れを高慢若も叶
 ひ難き事あれば伴りて勝を取んとせず曲者なり某し渠が爲に慮したりを云れんも口惜く存
 ざる故故意と一宿致したるが針の越座する心地ありまど物語るを聞く宮本も思ふが膝を
 進め佐々木が容貌より言語までも聞取りて猶曰く其者播州に住居致せし物語りはいはずや
 關口對て否々其咄しとなけれ共酒宴の折染醉中の物語りに劍道と申もの心根の能く据ら
 ざれば業の利ぬものあり先年某し播州あけて振枝を以て一人の劍者と戦ひしが心急ぎて心
 魂居らず因て地利間敷を量る事を忘れ十分の術顯れず残念至極なりし左なくば打殺すべき
 者成しをど話せしなりと申けれ武藏も大に悦び我も豊前も到るを佐々木官太夫とやらに
 試合を望むべし然にて今今の御話説にて諸事の心得になりたりとて兩人の頓て袂を分ちけ
 るが是より宮本武藏は心も勇み九州地へ渡らんをのどて足を速めて長門路當て趣きけり

○佐々木巖流武術手練の事
 并に小倉城下に道場を開く事

愛も亦佐々木巖流吉高と前年播州姫路を立退きでくり國々を修行おしけるが當時神明二刀
 流の元祖たる宮本武藏は已れが爲に横死を遂げし吉岡無二齋が實子なる由を所ものから心

中甚だ怖を其敵し難さを知る故に何卒して好き一術を工夫なし渠を休して身の安堵を計ら
 んと只管劍道に心を砕きしが好き工夫もあらざれを是より飛驒國へ趣き山中に籠り木の根
 岩角を相手として日夜の分ちなく工夫修練する事三年餘に及びける因て又劍道熟練する事
 以前に十倍せり爰に於て今は武藏も出會とも更に怖るゝ事有べからず卒や能き主人を得て
 年來の愁眉を開かんとて飛驒の山中を立出越前より加賀の方へと赴きけるが時しも燕めの
 飛達ふ有様の面白けれを感みよ之を打んとて鉄扇扱持ち丁と打て心燕は身を翻して飛過ぎ
 打洩したり此の如きこと三四回巖流と無念に思ひ暫時工夫なしけるが又一羽の燕の飛來る
 を見るより隙をす丁と打機會お翻す燕と共巖流も身を翻して發止と打たる早業見
 事お燕を打落したり是より後と一羽とまて打洩す事無ししかば益々其技を鍛練し工夫を加
 へて劍道の奥儀となし此術を燕返しの一刃と名付たり此より諸國を修業して普く劍道者と
 試合せし今今と手も立者として更に無く又手強き相手に會時と燕返し一の術を用るに一人と
 して之に敵する者あらず今は更々怖氣おしとて是より佐々木官太夫と名乗り山陰道を遍歴
 し中國に出で夫より九州へ渡り豊前に入り今しも安達山と云ふを越んと差掛る折しも此日
 と領主の狩場と見へて向ふの山間お當り大に関を作り螺貝を吹立鉄砲矢叫びの音山谷お響
 き渡り物凄冷じき有様なり所の庄官と出て通行を留むと雖も急ぎの旅行ある由を斷り段々
 と急ぎ行き遙か向ふを見渡せば五六町をかり先には國主の立場と見へ一段高く幕打廻し一
 騎當千とも云つべし武士嚴重お備を立たり斯る所に突然鉄砲の音耳元響き响と揚たる関
 の聲と共に其丈一丈許を有んと思しき大猪手負とみへて砂石を飛ばし樹木を蹴仆し荒に荒

て駈來り官太夫を見るより鼻嵐を鳴し眞一文字に飛懸るを心得たりと身を翻し鉄扇振上げ頭を丁と打たれば打れて痿まぬ荒猪の勢ひ猛く馳廻り又飛懸るを練磨熟達の佐々木なれを右外し左に翻し丁々發止と鉄扇を以て續け打に打ながら閃然と猪の脊に飛乗りければ猪と彌々怒り猛り狂ひて蹴落さんと飛び廻るを官太夫と事共せず猪の怒り毛片手に掴み爰に馬術を顯して乗居く賣付ければ流石の猛獸も今は大に弱り駈廻る足さへ四途路に成るを得たりや應と官太夫力任せ頭腦を打ければ急所を強く手練に打れ四足を折て嘸と臥し終ふ息絶死してけり扱も國主黒田甲斐守長政殿にと今目前官太夫荒猪を仕留し体を見物し長政殿を揚げ力量早業感するも勝たり旅人と見受るが誠一騎當千とも云つべし浪人ならば召抱へ度しと云これけるに近習の中より一色玉置は馬を乗出し官太夫の傍に到り來歴を尋ね浪人あるを承知せしむば打留し猪を主人の前に持參せん事を云入れければ官太夫固より仕官を望む身の上心中大に悦び玉置に伴れて長政の前に出で平伏と長政聲懸け只今の働に甚だ感心せし付てと御手前は劍道修行の爲に諸國を遍歴せらるゝ由なるが武藝之何流を修行致されしや官太夫首を上げ劍術は某し自ら工夫仕り一流を極めし故佐々木流と申て其奥儀に至ては龍風虎嘯若石も碎き又近頃燕返しの一術を工夫致せしは依り某し諸國修行中已に十餘年なれども未だ某しが上に立劍者を見ず又出會も致さずいへば相手なきを歎き山中に引籠りし事兩度及びたり是もて万事御賢察を願ひ奉つると言語爽かに答へける長政殿之を聞き暫時無言にて有しが大に感心せられ誠に天晴の劍道者なり是迄の事はいざ知らせ目前の働さ普通の者の及ぶべき所にあらず因て當座の褒美を遣すべしとて一色玉置

宮本武藏英勇傳

宮本武藏英勇傳

み内意ありて浪人の事故金三枚を下されける已よして日も西山に傾けば甲斐守長政殿には馬上勇々しく其日の獲物を持せて小倉を當して歸城せられける依て佐々木官太夫と面目を施し太守の同勢に伴ひて小倉に到り一色玉置が方に逗留して召抱へにも相成べきかど日々其沙汰を待居たりけり扱を甲斐守よと一日一色玉置を呼び出し先達て猛獸を仕留し佐々木官太夫と云者予思ふ旨われを召抱へには致すまゝ然れ共天晴得難き勇士なきを其儘捨るも残念なり因て二百俵を差遣を間城下に道場を開きて劍道の指南致すべし其中何よても功あらを改めて召抱へなん方一官太夫之を不足に思ひ辭退せむ勝手次第に立去るべしと申渡されける是は甲斐守殿猪狩の時に言葉を以て佐々木官太夫が胸中を探られしに甚だ巧言令色もて媚諂ふ意味有り況哉高慢の心を察し斯る者は妬み深く忠臣を非道に陥るゝと往々有事なりと流石明智の大將あれを早く彼が心中を見洞れて扱も召抱へられざりしなけり斯りければ一色玉置と右の趣きを官太夫に申渡しけるに佐々木は心に不足なれ共當時浪人且つ目途とても有ざれを玉置が申言葉に任せ有難き旨御受け致し小倉の城下に道場を開きしに元來武術熟練の者なるに由り追々に繁昌して今三四百人の門弟も出來て其名近國に聞へ最時榮て暮しけり

○宮本武藏佐々木巖流の對面の事
并に巴屋五郎兵衛義心の事

扱も宮本武藏と周防岩國山にて關口彌左衛門と同宿し圖らず敵佐々木巖流が在所を聞出しければ直ちに豊前國小倉來り其日之巴屋五郎兵衛と云ふ者の方へ宿泊けり既に夕食も食

し終り不圖座敷より外面を見遣るふ月影明るきを頼み年の頃十八九歳の若者大木の榎を相
 手として術を盡して木剣を遣ひ居たり武藏は一目に之を見居たりしが其進退度お適ひ宜ま
 き處の有ける故思はせ聲を揚て扱も出来たり能く出来たりと譽けるを彼若者之を聞き手
 を止めて此方より向ひ何人あれば此所に來られしぞ見馴ざる御方なりと云ふ武藏は其身の劔
 道修行者よて今宵當家に止宿する趣を語り太刀音の床さふ此所に來り思はせ不禮の聲を發
 したりと詫ふ扱入今宵の御客人なりとや拙業を御目お掛し恥しさとと恭々敷禮を返す武
 藏は其師匠を尋ぬる隣家なる佐々木官太夫なる由を聞き扱おそと思ひて曰く某しを先生
 の高名を豫て聞及し處おれを明日我を同道して引合せ給へど頼む若者の武藏の面を見詰め
 其儀は何より易き事なれども我師と試合を爲し玉ふ事は宜しかるまじ近年武者修行者時々
 來りて試合すれども一人として及ぶ者おし只一人先達て關口彌左衛門と云ふ武術者而已勝
 負分らず歸りたり御客人も天晴御立派の劔者ならんが官太夫に敵難かるべしと咄の中
 に亭主來りて大次郎甚だ不禮の挨拶なり汝們が劔道の甲乙を知る處かはとて武藏に向ひ其
 過言を詫び已に夜も更たれを御臥床を取らせたり御休み遊むるべしとて武藏を案内し座
 敷へ招じ亭主五郎兵衛の茶など出し御客人と劔道御修行の御方にて佐々木官太夫殿と試合
 御望みの由おれども其は御止り有て然るべし斯申とは強ち御客人の官太夫よ及ばせと申よ
 ならず私思ふ仔細おれを御止め申なりとて最様子有氣ふ述けるふぞ武藏之彼を恐れて此所
 を立去るは武名の瑾瑕ともあるゆへ是非々々勝負を決し度思ふなりと云ふ五郎兵衛は打點
 頭御尤おれども私が止る仔細と申は全体彼官太夫と甚しき奸智の有者おて彼が負る時と人

宮本武藏英勇傳

を恨むる事深ければ必ず御身に仇を爲さん私故有て彼が奸智の深さを知るとて其身吉岡無
 二齋が僕と爲り姫路逗留の鹿忽官太夫と無二齋の試合其後無二齋が横死の次第是極めて官
 太夫の所爲ならんと思ふ所以を涙拭く時移る迄語りける武藏は此長物語を聞居しが無念
 骨髓お徹し心も逸りしが頓て押鎮め扱々足下と蕪州の人なりとや吾も廣島に之知音の人々
 多く有ども久しく打絶て音信を通せざれば懐舊の心起りしなり又無二齋殿とやらんを討し
 と佐々木なるやと云ふ五郎兵衛答て確に夫とは指がたけれども吉岡様にて餘人の怨を受ら
 るゝ如き人にわらず是え必ず佐々木の龜岡の遺恨を晴さん爲に非道の所爲をなせまに相違
 の有べならず夫に又思ひ出も涙の種なれども老の縁言聞し召給へ彼吉岡様には二人の男子
 御在しが次男は御幼年の時より肥後の熊本へ養子と遣され嫡子なる清三郎様とて世嗣に
 あれども病身故敵討の願ひも叶はせ其を恨みお思ひれまか外お發病の爲にてとやあらん
 か自害して果られ依て大家の吉岡様なれども世嗣おきて御家は斷絶私は其時の悲み手足を
 抜るゝ心地おて何卒敵を討果し度くと思へども役にも立ぬ町人の悲しと吾と吾身を恨み而
 已なるが斯の如き次第也へ廣島の住居を何とやら心愛けれを此小倉に些の知音を便りて此
 處に來り今此渡世を致すなり然るに佐々木官太夫と云者は巖流に相違なれを故意と悴を
 門弟となし一と吉岡様の敵と相違おさやの様子を探り二つは其御次男が自然敵討もあらを
 其節御供を仕らせ度と存ト居れば都て彼が奸智を知れり付てと彼門弟と酒宴の節無二齋様
 を討ちし絆夫とはおしに口走りたれを其証據は悴の既お聞取りたり故に御客人も彼が奸智
 に中られ玉はんよとを痛みて御止め申ありと涙と共お物語る老の實意を頼母し武藏は聞

度驚く事而已なりしが今と心お堪兼て涙の車落るを隠し膝摺ぐせ扱は足下と久助あるかや
 町人ながらも義勇の程感ざるお餘り有り我は十三才の時熊本の藩士宮本武左衛門方の養子
 と爲たる無二齋が二男七之助ありとて劍道修行を云立て敵を尋ぬる次第且又關口彌左衛門
 に出會ひ其話にて官太夫は巖流にて當所よ在るを知り敵を討たんと爲に來りし絆を細々と
 話し又眼を瞬たよき御身の話よて兄上が自害して家斷絶と知たるは實に今が初めなり口惜
 や残念やと無念の涙はらりと膝に懸りて拳を濡しける亭主の五郎兵衛是を所扱と貴君は
 御二男なる七之助様よて在せしや私が爲には御主人同前なるを普通の旅人と心得て段々の
 不禮御免し下さるべし敵巖流を討んとて當地お御出なされたる其御宿を致せしも盡ざる御
 縁あり是必ず御尊父様の導き玉ふ故ならん然らむ敵討を近きにあり眼前なる官太夫を敵と
 知りし上からと少しも猶豫はなし難し御役よ立ざる町人の私なれども御用も有ば我々親子
 を御遣ひ下され度一と實意を顯し倅大次郎をも引合せ仔細を咄し其手引の事を申聞せ三人
 共々其手順を定めけるが宮本重ねて明日彌官太夫に對面して渠を討取るべし争か討洩す事
 は有まじけれども奸智に逞しき巖流おれを我が語を聞き忽ち跡を昏まし逃去らんを知る可
 らせ此儀は殊も掛念なりと云ふを五郎兵衛の聞て否々其儀は少しも氣遣ひ玉ふ事ならぬ某
 しと當所の町長に懇意の者おれを方便を以て頼み四方口々の木戸を閉固めさせ申べし又城
 内の役人方へも其傳手を以て内々願ひ申なむ假令巖流翼ありとて逃行道と有べからず此
 儀と御安堵有べしとて宮本に力を添へける早其夜も更闕れば明日御勞れ有ては宜しあるま
 じ先々暫時御臥みなされよとて五郎兵衛は勝手へ退さける頓て其夜も明ければ大次郎は逸

宮本武藏英勇傳

疾く起出で何角と心を添ける内既に朝飯も終りけるおど五郎兵衛の早々支度して町長の家
 を彼方此方と奔走し又役人中へも過分の贈物をなし内々仔細物語り金銀を惜まざり擲ちて頼
 みければ四方の木戸くは云に及む小道小路に至る迄も固めの人敷を出しけり倅て宮本
 武藏と大次郎に誘引て官太夫が道場に到るお流石名譽の佐々木なれば門弟と四五百人も有
 て早朝より指南の木劍喧しく打合ふ掛聲と四方お響きて夥し扱も大次郎と宮本を戸外に忍
 ばせ稽古場へ入來り平生の如く官太夫始め一同へも禮を述べ又官太夫に對ひ私し愚父の遠
 縁ある者の由にて一人の武者修行來り昨日舎りしが先生へ直に面會致し度旨私しへ頼み
 間只今誘引参りたり何卒御對面下されしは有難く存ずると云へば官太夫は何心なく夫と
 く殊勝の事あり殊も足下の縁者とわれを仔細有べのら此方へ通し申されよと座を構へ
 て待受けしる大次郎は悦びたる体にて表に出で宮本に通じ案内す宮本と伴之れて座に通
 官太夫の前へ進みて曰く如何に佐々木巖流の官太夫拙者は宮本武藏正明なり御身糸だ忘れ
 とせまじ越州廣島在の今戸堤に於て我が實父吉岡無二齋を汝より出てたる災を思は播州
 龜島にて試合に負しを遺恨お存ト卑怯にも鉄砲の飛道具を以て暗殺せしお依り因て汝を討
 取ん爲め所々方々を尋ねしが今日天我お幸を降し給ひ汝お廻り逢せたり俱不戴天の仇敵
 尋常も勝負せよと呼はれを佐々木と呵々と打笑ひ這は新した事を聞ものお吉岡無二齋の
 我を小兒の如く侮り口論を仕掛し故無事を計れ共承引せず因て武士の名汚と思ひ討果せし
 が無二齋は越州の人ない足下に肥後の國の者ある由然れを奚ぞ父子の縁か有ん筋違ひなる
 仇敵呼はれ此官太夫左様の事柄承引せしと罵れば武藏は聲を張揚て我は十三歳の時熊本の

宮本武藏英勇傳

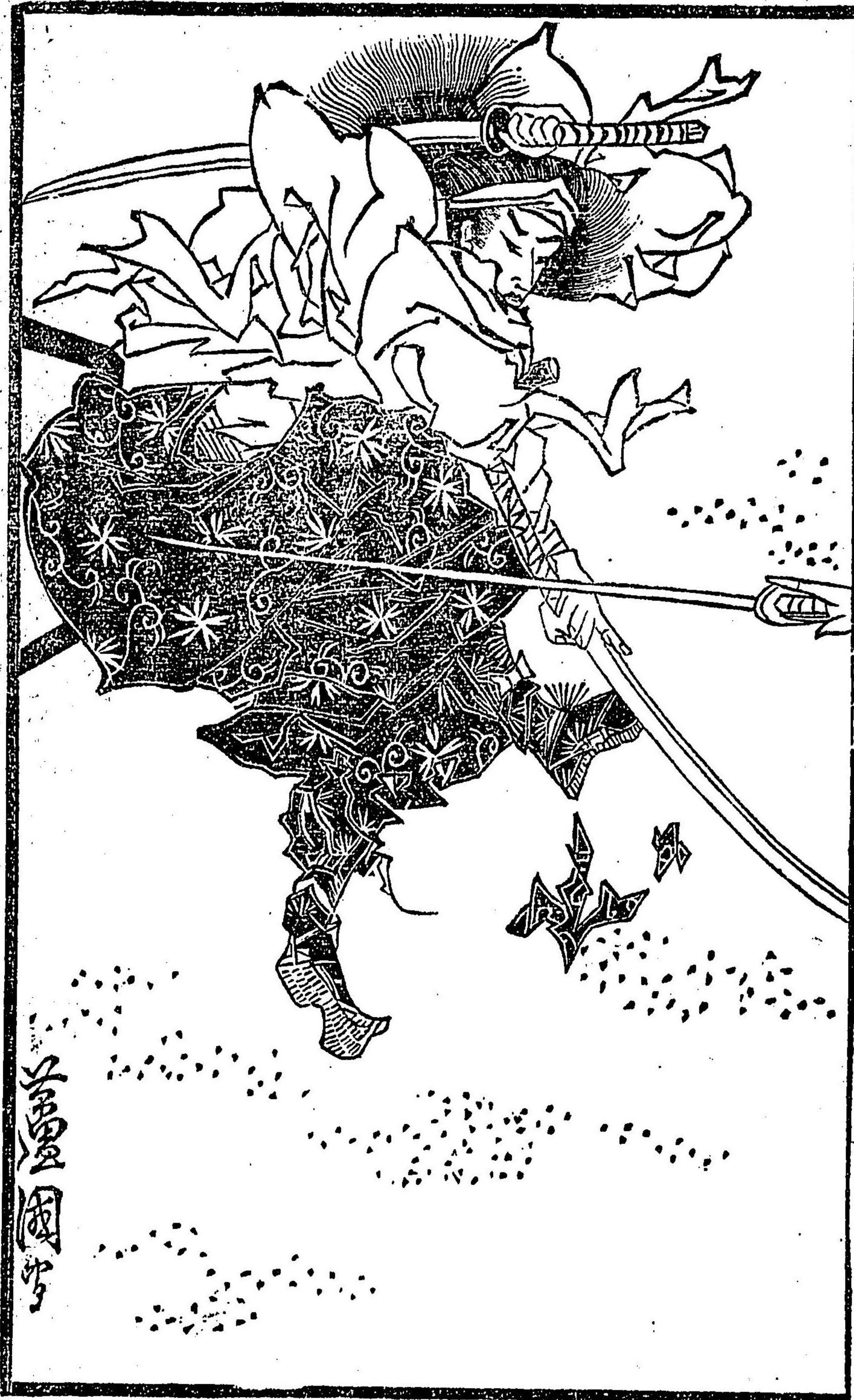
士宮本武左衛門の養子と爲りたれば主人清正公より免許を得て尋ねる實父の敵たり汝が非
を藏み詞工みに卑怯よも申逃れんと爲せども現在當時父に供せし久助が汝の近隣に在りて
最早夫々當所の出口を人数を以て固めたきば免るゝ事は叶はぬぞ心を定めて潔く勝負せ
られよと呼はれ流石奸智に長せし巖流も道理と事實を言詰られ彌敵と定まりける是を聞
より門人輩口々に假令宮本にせよ二刀もせよ我々が師を討んとする曲者免すまじと得
物を引提て打對はんと巖流は急ぎ押留め方々の志しと忝きければ我とて一一流を極
め一派を弘めし者なれば卑怯の所業有て此官太夫が名汚ありと制しつゝ又武藏に向ひ唯
今足下より名乗掛られし上から尋常に勝負を決せんが此所ふて互に雌雄を争ひなば後日
の批判も面倒なり殊に大守より恩祿を頂戴致す身の上なれば私に勝負は決し難し因て今
より願書を差出し御差圖を任せて快よく立合天に任せて互の雌雄を決せんふと如何にと穩
當なる挨拶なれば武藏も聞て大い悦び天晴の申分流石と天下に聞へし程の佐々木巖流殿な
り然らむ我も願書を指出して其指圖に従はんとて早速双方より眞劍の勝負せん事を願書に
認め其筋の役人迄差出したりけり

○黒田甲斐守殿手配り下知の事

并ふ豊前灘島に於て復讐の事

扱も當國の太守黒田甲斐守長政朝臣は宮本佐々木の兩人が願の趣き有司より聞取られしが
斯る大事を粗忽に許し難く因て双方相話し願書の趣き相違なきに於て敵討眞劍の勝負
致さすべし尤も加藤家へ對し聞へもあれば見苦しき助太刀扱は勿論聊かあてを双方共に與

劣がましき儀わらざる様吟味を遂げ尋常に立合致さすべしと下知せられける故夫々の役人
へ申渡し相成り是も因て山田金左衛門堀徳内の兩人實否問札の爲め巖流が宅に到り宮本
佐々木に面會し委細に吟味を遂げるに願面の趣き相違なきに然るを勝負の儀の灘島に於
て明日決すべし尤も双方共に助太刀等は一切相叶はず其旨屹度相心得らるべしと嚴重申
渡し武藏は一旦旅宿屋五郎兵衛方へ引取り兩人共慎み罷り有べしとて兩人の宿所は各役人
を以て相守らせけり斯りけれを此沙汰早く遠近に聞へ諸人目覺しき事に思ひ武藏は神明二
刀流の元祖無類の達人佐々木も天下に名高し無双の名人なり此勝負こそ又と有まじき見物
なりとて皆々前夜より船の用意其外思ひく支度して待居たり己に其日も成けれを先
達て下役人共は灘島に到りて其構を取繕ひ待請たり斯て又旅宿屋なる巴屋五郎兵衛と無
二齋への恩報となりとて身代を抛ち取持けるもへ武藏が悦び大方から衣類等に至る迄立
派に打扮主人清正公より拜領の志津三郎兼氏の刀と貞宗の脇差を帶し警固の役人よ困れつ
と押出さ佐々木巖流も亦衣服を整へ備前長光二尺八寸の刀に來太郎國光の脇差を帶し同
く警固の役人よ困まれ小船に乗て押出せを遙か後より檢使として山田金右衛門堀徳内の兩
人黒田家の幕打たる船に打乗の徐々と漕せたり其外警固雑色の者百三十八人船二十艘にて乗
出と爰に佐々木が門人は如何に太守の命あればとて師匠の討るゝを安閑と見物して助けさ
る法やある我々心を合せ助太刀せんとして二十人ばかり船を打乗り眞一文字に漕出すを此事
早く檢使に告ぐる者あれを早速警固船へ下知を傳へ如何なる親類縁者たり共島へ上陸す
べからず若し法度を背く者は理非に固らず切捨たるべき由を申渡し觸廻しけるにぞ助太刀



の船は是非なく島岸に扣へて見物と又遠近より敵討を見んとて老若貴賤何れぞ小船を取乘り來り島の周囲の水面の見へぬ迄は取巻き見物したりけり抑此灘島と云ふ小倉の城下より海上十六七町離れて周圍八九丁程の小島なり頃と慶長四年亥の八月十五日既に準備も備へりけきと檢使の両士より自然勝負永引節は機敷にて太鼓を打鳴すべし右を號令に一旦双方へ立別れ互ひに息を入れ再び尋常も立合ふべしと申渡したり因て兩人と畏りて御請をさし佐々木巖流は西の方より宮本と東の方より立出兩人共お檢使お一禮して立向ふ此時太守より折敷に土器白粥盥を載せ兩人の中央に据へ双方へ土器を與へ銚子を加ふ兩人之を請て呑干し互に大地へ打付て左右も立分れて構を爲す時に武藏は大音揚げ如何に佐々木巖流吉岡無二齋を殺害せし事已み昨日其方が口より吐露せし因て實父の無念を晴さん爲め此處お唯雄を決するなり尋常に勝負せよと呼はれ巖流と冷笑ひ問答は無益なりと二尺八寸の一刀を抜放し上段に翳せを宮本の兩刀を天地に構へて双方共にぞりくと詰寄せ互に隙間を窺ひ位を料りて居たりし隙間をや見出しけん巖流ヤツと一聲叫ぶと齊しく打込一刀は電光石火の如く吐嗟武藏は眞二つと思ひの外十字よて發止と受止たれば又双方暫時進退あく合せし而已あて變化も有らざりしが稍有て武藏は十字の構を引よと見る間に打込一刀と脱兎の波を走るに似て佐々木が頭上を目標閃然と切入を佐々木も熟練の事なれば丁とをがりあ受流し一足踏込よと思へば横に拂ふ一刀は陽炎の如く突は拂ひ打を開き互に修練の早業と片々として梨花の舞紛々として瑞雪の翻るも異あらず一上一下一來一往虚々實々の秘術を盡し春の野も遊ぶ胡蝶の花も戯ふるゝが如く早瀬の水も深ぶ月の手に取れざるに似て目に

も止らざれば彌檢使を始め警固の役人船中の見物に至るまで手に汗を握り片唾を呑み酔へるが如く只忙然として居たりけり兩雄は一世の大事と精神を勵まし退進駆引度に適ひ右へ飛左りへ潜り千變万化の極意を尽して打合太刀音叫ぶ聲物凄じく稍半時餘の争へども更に勝負は見ざりけり此時機敷みて太鼓を打鳴しければ警固の足輕破乱くと走り寄り兩人の中へ六尺棒を突入しにより兩人は刀を引徐々と左右に分れて休息す此時醫師双方へ立寄息合の藥を與へ又兩人共聊かづゝの薄傷も有るに膏藥を貼布にて巻なとし厚く手當てを加へざり暫時有て再び令に隨が以東西も立向ひ以前の如く構へし時武藏は心中お巖流が手練早業聞しお優るを感之斯の如き戰にては何時か勝を取べきぞ尋や合氣の術を用ひんとて合せし刀を引外し飛退りて躰を構へ合氣の術よてちりくと詰寄せ此妙術に流石の巖流も武藏の氣合神臟お徹し大に身躰勞れければ心中に武藏の妙術を感じ斯て之渠に敵し難し我も妙術を以て討取んと合氣の術に惱みし体にて次第く以後退りしければ武藏と得たりと合氣の術を變て陽炎の閃めく如く打込一刀に早や巖流と眞二つと思ひしに流石は術者閃然と流す機會に身を躍らせ中返りしながら延して拂ふ一刀は是則ち燕返しの一術めて武藏と咄嗟売竹割と見へしが此方も閃然と宙に飛上り發止くと戦ふたり跡にて見れば此太刀先武藏が袴の裾を横に切裂しと云ふ實に危き事ありけり宮本猶も合氣の術を仕掛ながら一聲叫んで打込ひ左劍佐々木が眉間へ切込みし切れて瘻まぬ剛氣の巖流飛懸つて肩先より乳の下迄水を溜らせ切下れを流石の巖流も今は堪へ兼ね尻居に哄と倒るゝも武藏其儘乘懸り南無實父無二齋殿の亡靈照覽あれ敵巖流を討留たりと止めの一刀拳も貫れと刺た

百 けり是を見るより檢使を始め船中の見物一同み爲得や〜と呼ぶ聲之海面響き渡り
暫時の鳴も止ざりける斯て武藏は心靜かに巖流が首を打落し檢使に一禮を述べ佐々木が首
級實父の墓前に手向度由願ひけれを檢使を道理の事なりとて首と宮本に與へられ佐々木の
死骸を篤と改め此旨太守へ披露致さんどて則ち武藏を召連を歸城して敵討勝負の次第を逐
一言上よ及ぶ甲斐守殿と武藏を面前に呼出さるにぞ宮本は有難き趣きを御禮申して退出し
夫より堀徳内が方に留り居たりけり因て黒田家より急使を以て熊本に此次第を達せられし
か心清正朝臣を始め養父宮本武左衛門も大に悦び早速登城して此禮使を願ひけるよぞ則ち
同人へ申付らる此お於て黒田家の使者と同道にて小倉に來り主人の口上を述べ次に又御厚
志に因て悴武藏儀首尾能くを敵討し段千万有難く存じし因て武藏御渡し下されし様よと乞
申せを黒田侯に之歡むれ加藤家の使者に對面あらんとて武左衛門を呼出され盃を與へ武藏
の孝心を稱譽隨意に同道して歸國すべき由申渡されけれを武左衛門大に悦び早速堀が方に
到り段々の厚意を謝禮し武藏を受取堀の宅を出で彼巴屋五郎兵衛方へ來りけり武藏は絶て
久しき養父に對面し歡ぶ事限なく且つ五郎兵衛が事歴此程の義心實情を逐一物語りければ
武左衛門甚だ感悦し厚く禮を述べ五郎兵衛父子は涙を流して喜悦し目出度本望達し玉ひし
と吉岡の旦那様柳葉の蔭めて嘸御喜び居玉ふべし我々父子の歡ばしよとて種々響應し今
宵は逗留有べき由を勧めけるを宮本武左衛門は是を辭し生命を持つ身なれを一刻も早く歸
國せんとて武藏を促しけるに武藏は養父より向ひ某しは暫時御暇を玉はり是より薙州立越
へ巖流が首を實父の墓前に手向度しと云ふ武左衛門と是も尤の事ありとて許しけるふを武

宮本武藏英勇傳

藏と直ち薙州へ趣き父の墓前に手向て懇切に回向あし夫より斷絶したる父の屋敷跡をも
餘所ながら詠め遣り昔しと今の事變り見る物都て革りけれを又懷舊の涙袖を濡したり此
時毛利侯も此事を聞及ばれ武藏を呼出し孝道と働きを稱美し引出物數多給と無二齋の
家名再び相續の事を申聞されけれも清正朝臣の恩遇と云ひ何分立歸り難き旨を以て辭退
に及べを毛利侯も本意なく思さるれを止を得ず暇を賜りける武藏は夫より引返して日な
らず熊本へ歸着せしかば養父武左衛門早速召連登城しけるに清正朝臣大に悦喜せられ盃を
下され甚だ稱美ありて氣色殊に麗しく尙又諸國修業中の物語を聞んが今日は休息せよとて
暇下されけるにぞ親子連立退出したりける其後兩夜の徒然に武藏を呼出され修行中お在し
事共の物語を聞れしとなり此時義兄弟なる有馬喜兵衛と宮本が本望遂し趣きを聞傳へ熊本
あ來り敵討の喜びを述べ武左衛門方に逗留して在しを武左衛門が吹擧に因て加藤家へ召出
され新地三百石を頂戴して劍道を指南しける扱其後ち武左衛門病死せしかば跡目を武藏へ
押しけるが武藏は元來遁世の志し有し故一生妻を娶らず後年に至りて喜兵衛が一子を貰ひ
請け是を世繼とし其身は暇を願ひて生涯劍道を以て諸國を修行し六十二歳にて熊本お於て
病死せり其墓は同所本妙寺に在りと云又其子孫と加藤家退轉の後ち小倉なる小笠原家お仕
へ三百石を頂戴せしが今尙は同地に士族として連綿せり彼佐々木が討れし島は今お巖流島
と云ひ永く孝義の芳名を稱へけり

宮本武藏英勇傳

一百

宮本武藏英雄傳大尾

明治廿一年六月廿八日印刷
同同同
年六月廿九日出版
年七月十三日發行

版權登錄

著者

大阪府北區網島町四十八番屋敷

梶木正太郎

發行者

大阪南區順慶町通四丁目三番地

此村庄助

同

大阪南區安堂寺橋通四丁目六十二番地

田中太右衛門

印刷者

大阪南區長堀橋筋二丁目六番地

前野茂久次

版權所有



